

---

# 今夜、風の吹く場所で

ペケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今夜、風の吹く場所で

### 【Zコード】

Z5802D

### 【作者名】

ペケ

### 【あらすじ】

この世は気が滅入ることばっかりだ。付けたくもない仮面を付けて、みんな笑いたくもないのに笑ってる。けど、仮面を付けなきゃ息苦しくて、生きていけなくて、ほんとにどうじょつもないね。でも、僕が唯一心惹かれるものがあるとすれば……。

## 1 (前書き)

この小説は作者の処女作となつておりますので、どうか生暖かい目で見守つて下さい。

高校の入学式も、2回目になると何の感慨も湧かないものだよ。これは僕が人よりも若干長い高校生活で得た最もいい教訓の1つさ。だから僕はその日学校に行く気にはとてもじゃないがなれなかつたんだけど、下宿先の大家さんに促されて仕方なく出席したんだ。彼女、とてもいい人だから、困らせなくなつたんだよ。

入学式では校長先生やら来賓のお偉いさんの話を5000時間ばかり聞かされたね。あんな長い話をいつたいどこの誰が求めてるつていうんだい？本当に不思議でならないよ。話は長けりやいいつてもんじやないのにね。

退屈極まりない式を終えた後、僕は一週間前から始めたバイト先へと向かつた。コンビニのバイトなんだけど、あれって本当につまらないね。僕がまじめにやつてないつてからつてのもあるかもしないけど、本当につまらないよ？あまりおススメはできないね。けどこれも仕方ないんだ。学校に行くのにはお金が掛かるからね。誰も出してくれないんなら、自分で稼ぐしかないだろう？

僕は17の時、つまり高校2年の時、学校を退学した。理由は言わなくてもいいかな？あんまし格好いい理由でもないんでね。それで18の時、つまりこんときだけれど、別の高校に入学し直したんだ。それがさつきの高校さ。

クラスの奴らをちらつと見たけど、なんて言つのかな、僕とは合いそうになかったな。あまりああいう騒々しい連中は好きじゃないんだよ。ジロジロこっちの方を見てきては、ひそひそと話を始めたりするだろ？嫌いなんだよね、そういうの。分かるだろ？

夜中の9時にバイトが終わつて、僕はバイクで下宿先に帰つた。好きなんだよ、バイク。15の時から乗つってる。

下宿先は築20年くらいの、少し古びたとこで、僕以外に高校生が2人、それと大家さんが住んでいた。この大家さん、若くてきれいな人なんだけど、どうやら独身みたいだつた。でも薬指に指輪してたから、細かいことは訊かなかつたよ。訊くのは野暮つてもんさ。ちなみに僕以外にここに住んでる2人だけど、顔も見たことないね。食事はそれぞれの部屋で勝手に食つてたし、僕は普段いないし。それでも1つ屋根の下に知らない人間と生活するつてのはけつこう精神的に来るぜ？僕が神経質なだけかも知んないけど。じゃあなぜ僕がそんなとこに住んでるのかつて言うと、さつきも言つたようにお金の問題さ。それ以外にないね。

それでこの下宿先に住み始めたのは春休みになつてからで、その前は前の高校近くの下宿、ヒドイとこだつた、思い出したくもないね、その前は実家のアパートに住んでた。母さんと妹との3人でね。僕と母さんの仲はあんまりよくなかったな。の人、まだ若かつたら、2人の子持ちつてのがイヤだつたんだろうな。小さな頃はいつもあの人ぶたれてたよ。だから僕は16の時、最初の高校に入る時に家を飛び出したんだ。それから一度も母さんと妹には会つてなかつた。母さんには何回か電話をしたけど、ほとんど親子の会話じやなかつたな。役所の受付みたいな感じの、事務的つて言つかさ。そうそう、僕には年の離れた妹がいるんだ。たぶん、そのときは10歳だつたと思う。

とても可愛らしくて、賢くて、素直な子なんだ。僕なんかと違つてね。たぶん、君はあんないい子を見たことないだろうな。年の離れているせいか、いつも僕にくつついて甘えてきていたな。本当にいい子なんだよ、本当。

でも当時はその妹、美里つて名前なんだけど、あの母親と2人で暮らしていたんだ。母親は美里をぶつたりはしないけど、あまり可愛がつたりはしてなかつたと思うな。そう思うととても心配だつたけど、その時の僕には、美里のことを考えてられる余裕はなかつたんだ。言い訳にしか聞こえないけど。

それで、僕はバイト先から下宿先に戻つて中に入つたんだ。キッチンには大家さんしかいなかつた。

「お帰り、圭介くん」

大家さんは僕に気付くと笑いかけてきた。僕は軽く頭を下げる。

「お客さんが来てるわよ」

「客?」

僕は訊き返した。

「ええ。部屋で待つてるわ」

大家さんはにっこり笑つた。

「はあ」

僕は曖昧に返事をすると、一階の自分の部屋に上がつた。

僕に客? そんなもの、見当も付かなかつたね。僕をわざわざ訪ねてくる奴なんているのだろうか? けど大家さんも大家さんだ。そんな奴を勝手に部屋に上げるなんて。彼女、どこか警戒心に欠けるところがあるんだ。

僕は自分の部屋のドアを開けた。どんな奴がいるのか用心しながらね。

ドアを開けて部屋の中を見た時、僕は本当に驚いたよ。

僕が使つてるベッドの上にそいつはいたんだ。ブカブカのパジャマを着て、ベッドにちょこんと座つっていたそいつは、僕に気付くとパツと顔を輝かせて、こつちに手を振つてきたんだよ。

「お兄ちゃん!」

誰なのか、理解するのにしばらくかかつたよ。あまりにも混乱してたからさ。

そこにいたのは、僕の妹、美里だった。

「なんでお前がここにいるんだ?」

僕は少しどぎまぎしながらドアを閉めた。知らないおっさんがいるよりも予想外だつたんだ、「冗談抜きに。

「えへへ。来ちゃつた」

美里はベッドから降りると僕に駆け寄つて来て、抱きついてきた。みぞおち辺りに頭がぶつかつて、危うく息が詰まるところだつたよ。僕はまだ戸惑いながらも、美里の姿を観察した。

美里は全然変わつていなかつた。2年間で少し背が伸びたくらいで、他は僕の中にある美里そのものだつた。黒くてサラサラした髪、くりつとして潤んだ大きな瞳、透けるような白い肌。平均よりも若干小さめの彼女は、僕の胸に顔をうずめ、昔と同じように甘えてきたんだ。2年間まったく会つていなかつたなんて嘘みたいだつたよ。僕は美里の頭をそつと撫でながら、「どうしてお前がここにいるんだ?」ってまた訊いた。妹は抱きついたまま、まだ頬をこすりつけていた。僕はやれやれと肩をすくめた。何を訊いていいのやうそつぱりだつた。そこで質問をえた。

「なんなんだ、その格好」

彼女の着ているパジャマをよく見ると、それは僕のだつた。

「ん~?」

彼女はやつと僕から離れると、「えへへ」と照れ笑いした。

「パジャマ持つてくるの、わすれちゃつた」

美里はパジャマの上しか着ておらず、パジャマの裾が膝辺りまできていて、手のひらはまだ袖の中になつた。

「それで、なんであなたがここにいるんですか?」

僕はバカ丁寧な口調で美里に言つた。ええと、これで何回目だつけ? けど妹は何も言わずに、自分のバッグの中を漁りだした。服なんかを引っ張り出した後、一番奥からくしゃくしゃの便せんを取り出し

「コレ

た。

僕はそれを受け取つて読んだ。便せんにあつた言葉は一言だけ、  
さよなら『だつた。

』

僕は自分の目を疑つたね。まさかと思つたよ。その筆跡には見覚えがあつたんだ。

「母さん…か？」

ああ、声がどうしようもなく震えてやがつた。妹は、答えてほしくなかつたけど、「うん」と答えた。

「母さん、どこに行つたんだ？」

「昨日帰つたらテーブルに置いてあつたの。お母さん、どつかに行つちゃつたんだと思う」

美里はまるで気にしてないかのように振る舞つたけど、彼女の声もかすかに震えていた。

その時ちょうど、僕の携帯が鳴つた。だいたい想像はついてたけど、やつぱりあの人だつた。

「ごめん。ちょっと」

僕は部屋を出て、キッチンを通つて外に出た。途中何も知らない大家さんが僕に笑いかけたのが、妙に僕をイラつかせたな。

僕は電話に出た。

「もしもし」

『あの子、来てる?』

相手を確かめもせず言いやがつた。

「どういうことだよ！」

『そう…。ならいいわ』

母親の声が冷静そのものだつたことが、僕の怒りを搔き立てた。

「なんで美里を置いて出て行つたりしたんだ！それでも母親かよ、あんた！」

馬鹿デカイ声を出したもんさ、我ながら。

『…そんなこと、圭介が言えるの？』

ハツとした。そうだ、僕は妹を置いて逃げ出したんだ。それを言わ

れると、返す言葉がないことが、腹立たしかった。

『いいわ。そんなことはどうでもいいのよ。頼れるのは、アンタしかいなかつたからね』

やはりこの人にここに住所を教えるべきじゃなかつたって、僕は後悔したね。書類なんかの手続き上、仕方なかつたんだけどさ。

『その子のことは任せるわ』

「ちょっと待てよ！何言ってんだ！」

「ずっと声が裏返つてたよ、情けないことに…」

『疲れたのよ…』

「え？」

『母親であることに、もう疲れたの…』

「ふざけるなよ！美里はどうなる！」

『…もう連絡して来ないでちょうどいい。美里のことを頼むわ』

「ちょ…待てよ！ クソッ…！」

電話が切れた。あっけなく切つちまつたんだよ、あの女。

受話器から聞こえてくるツーツーツーつて音がイヤに大きく感じたね。言つとくけど、あの女は僕と美里の実の母親なんだぜ？それがさ、なんだよ…。

僕はポケットからタバコを取り出して火をつけた。でもね、全然ダメだつた。

「クソッ！」

僕はタバコを地面に叩きつけて、足で揉み消した。タバコの形がなくなるまで、何度も何度もね。

部屋に戻ると、美里はまた僕のベッドの上に可愛らしく座っていた。僕が何を言つべきか迷つていると、

「ごはん食べた?」

妹は出し抜けに言つた。

「え? あ、ああ」

晩飯ならバイト先で、売れ残った弁当を食べたな、確か。どうでもいいけど、まずかつた。

「美里は?」

「食べた」

美里はドアを指差した。

「おばちゃん」と

どうやら大家さんにしてしまったらしい。後でお礼を言わなきやなつて思いつつ、しかしおばちゃんはないだろうって苦笑した。とりあえず僕は机のイスに座つて、これからのことについてをはせた。美里を住まわせることに異論はなかつた。それは全然いいんだ。あの女にはもう任せられるわけにはいかないから。しかし問題は生活費だつた。そんとき僕の生活はかなりギリギリで、下宿代の振り込みを大家さんに待つてもらつてる状態だつたんだ。そんな中で2人分の生活費をまかなえるだろうか?

僕の考えてることが分かつたのか、美里は心配そうにこつちを見ていた。今のバイトだけじゃ足りないなこりやつて、迷う暇なんてなかつた。

僕は美里に笑いかけた。その意味を知つてか知らずか、美里も笑つた。

「ねえお兄ちゃん」

「ん?」

「お風呂入る」

「あ、ああ。…え？」

僕は間抜けな声を出した。いきなりの美里の発言に僕はおおいに困つたね。

「な、何言つてんだ、美里？」

「え～、昔は一緒に入つてたでしょ？」

確かに一緒に風呂に入つたことはあるが、おれは美里が5歳のときまでだぜ？それから僕が出て行くまでの間、一度も入らなかつたんだ。

「お前、もう10歳だろ。一人でお風呂に入れるだろ」

けど、妹は聞かないんだ。

「ヤ。一緒にに入る」

昔は素直だつたんだけどな。やつぱこの子も年を取るのか。なんか普通とは逆みたいだけど。このくらいの年になれば、普通兄貴を嫌がるはずじゃないか？いくらなんでもさ。

それでも美里は僕の目をじつと見て訴えかけてくるんだ。そしてだんだん、今にも泣きそうな顔になつてくるんだよ。正直、僕は美里のこの表情に昔から弱い。

思えば、美里には2年間も寂しい思いをさせていた。家を飛び出したとき、美里には一言も言つてなかつたから。美里のことだ、きっと寂しがつて、すぐ泣いたに違ひない。そのせめてもの罪滅ぼしかもしれないな、これは。

「…分かつたよ」

僕がそう言つた途端、美里の顔にいつもの明るさが戻つたね。いつもこうなんだよ。僕はそれに、いつも騙されてるんだけどね。

この下宿の風呂は共用で、僕らが下に降りていった時、ちょうど大家さんが風呂から出て来るとこみだつた。

「仲良しなのね」

大家さんはいつもみたく笑つた。濡れた髪をバスタオルで拭いている姿に、僕はドキッとした。男ばかりのこの下宿で、この人は大胆というより無防備だ。他人事ながら心配になつたよ、実際。

「ご飯、ありがとうございました」

僕は言った。

「いいのよ、気にしなくて」

大家さんは膝をかがめ、妹の頭を撫でた。妹は気持ち良さそうに目を細めて、猫みたに喉を「ロロロロ」と、いや、鳴らしてないけどそんな感じつてこと。

「可愛い妹さんね」

僕はそう言つた大家さんの目が、どこか悲しそうな気がした。脱衣所に入ると、妹は着ていた僕のパジャマを脱ぎ始めた。もちろん僕はとっさに目をそらしたさ。いくら兄妹だからって、この子には恥じらいというものがないのかとすら思つたよ。

妹は服を脱ぐと、バスタオルすら持たずに行つちまつた。僕は風呂で妹の髪を洗つてあげた。美里の髪を洗うなんて何年振りだろうな、なんて考えながらさ。細くて柔らかい妹の髪は、僕の指をするりと通り過ぎて行つた。力加減がよく分らなかつたんだけど、妹は嬉しそうに鼻歌を歌つていたな。

美里の肩や背中を見たら、かなり華奢でやせていた。普通の女の子がどれくらいか知らないけど、それよりも細いと思うよ。ずいぶんと、ひどい生活をしてきたのだろうな。なんせ、一緒に暮らしていたのはあの女だ。美里の身体の弱々しさを見るたびに、あの女への怒りが込み上げてきた。

湯船に2人で浸かっている時も、妹は鼻歌を歌っていた。僕の知らない歌だつたな。子供の成長に対して、2年間のブランクはやはり、長すぎた。それをまざまざと見せつけられた気がして、僕はひどく落ち込んだね。

「なんだか楽しいね」

美里の笑顔が苦しかった。

「お兄ちゃん、彼女とかいるの？」

予期せぬ突然の質問に、僕は戸惑った。

「いない」

「そう、よかつた」

湯けむりの向こう側の美里の顔がほのかに紅潮したように見えた。ただ単に、のぼせているだけかもしれないけど。

「いないんだ、よかつた」

妹はそう繰り返した。

「なんだよ？」

僕は言った。

「別に」

妹はまた僕の知らない歌を、今度はハミングをつけて歌つた。風呂場だからかもしれないけど、とても上手だつたな。

風呂から上ると、美里はまた僕のパジャマを上だけ着た。じゃあ僕は何を着ろつて言つんだ？

美里の長い髪をドライヤーで乾かしながら、僕は気になつていたことを妹に訊いた。

「美里、学校はどうしたんだ？」

「ん~、なにが？」

妹はとぼけた。

「なにが、じゃないよ。学校はどうしたんだい？」

そう、この子は僕の家に来た。てことはつまり、学校には行つてなかつたんだ。クソ、母さんはなんであんなことを。

「…いいの。私はお兄ちゃんと一緒にいたいの

「…」

どの道、そこからじや美里の学校は遠すぎたし、何より、そんなお金はなかつた。でも…。

「さみしくないのか？友達とか」

「う~ん

妹はちよつと考えて首を振つた。

「ゆうこちゃんやしまちゃんに会えないのはさみしい。3人でね、いつも遊んでたの。とっても楽しかった。でもね、いいの」

美里はこっちの方を振り向いて、僕の目をまつすぐ見つめてきた。

「お兄ちゃんといふ方が、いい

「美里…」

本当、僕はどうにかなつちまつたらじい。美里の言葉を聞いて、僕は泣いちまつたのさ。

2年間も美里をほつたらかしていた僕に、美里は変わらない態度で接してくれた。責められてもなじられてもおかしくない僕と、この子は一緒にいたいと言つてくれた。それがなんだか嬉しくて、情け

なくて、僕は泣いちまつたんだ。

突然泣き出しちまつた僕を見て、妹は慌てたみたいだつた。オロオロしながら、僕の顔をのぞきこんでしたり、頭を撫でてきたり、自分が泣きそうになつたりしてさ。その様子がなんだかおかしくて、僕は笑つた。そんな僕を見て、美里も笑つた。どつちも泣きそうな顔して、2人で笑つてた。

僕はふかふかの美里の頭をポンポンと叩いて、「もう寝るかい？」

つて訊いた。美里は元気よくうなずいた。

僕の考えでは美里がベッドで寝て、僕は床で寝るつもりだったんだけど、彼女、どうしても僕と寝るつて聞かないんだ。仕方なく、狭いベッドの上に2人で寝ることになった。狭い上に、僕は妹と壁の間に挟まれちゃって、ほとんど動けなかつたよ。

それで電気を消して「ざ寝」としたんだけど、美里が色々と話しかけてきてさ、なかなか眠れなかつたよ。

「それでね、その井上くん、いつも私のふで箱を隠してくれるのよ。私が、返してつて言つても返してくれないの。ヤになつちやう」

「それはきっと、その子は美里のことが好きなんだよ」

「違うよ。井上くんは8組の竹中さんが好きだつたんだよ。ゆうこちゃんがそう言つてたんだもん」

「そりなのかい？」

「やうなの。竹中さん頭も良くて……かわいくて……算数が得意で……」

美里の声が小さくなつていき、言葉も途切れ途切れになつてきた。そのときもう夜中の11時だつたからね。美里は普段そんなに起きてなかつただろうからさ。それによく考えてみれば、美里は僕の下宿先までたつた1人で来たんだ。10歳の女の子がだよ。きっと怖くて不安だつたんだろうな。最初美里に会つた時はそこまで考えられなかつたけど、改めて考えたら、美里がすごく不憫に思えてきたね。だから僕は、精一杯優しくしてやううつて決めたんだ。

「もうおやすみ

「お兄ちゃん……」

美里がまどろみながら言つた。

「ん？」

「うでまくら……して」

「……こよ

美里は僕の腕に頭を乗せて、胸のあたりに鼻をこすりつけてきた。

「いいにおい…」

昔はよくこうして2人で寝ていたな。それがなんだかとても遠い日のことのように思えた。

しばらくすると、彼女は静かな寝息を立て始めた。

「おやすみ」

美里の寝顔に、僕は言った。僕はさらに眠りにいく体勢になっちゃつたけど、美里のためなら、安いもんだった。

それからどのくらい時間が経ったかは分からないけど、僕は夜中に突然目を覚ました。なんだか変な音がした気がしてさ、目を覚ましたんだ。それからちょっと、違和感みたいなのを感じた。最初はぼんやりしていて気付くのにえらく時間がかかったよ。でも、その日はベッドに一人で寝ていないということに気付いたんだ。

「美里…？」

美里がいなかつた。僕はベッドの上に起き上がって辺りを見回した。シーツやらなんやらがぐちゃぐちゃになつててさ、美里が寝ていたところがびっしょりと汗で濡れていた。その冷たい汗に手が触れたとき、背中に寒気が走つてはつきりと目が覚めたね。

僕は部屋を見回した。ただトイレに行つてるだけかも知れないつてのに、僕はどうじょうもなく焦つていたんだ。そしたら、どこからか寝息が聞こえてきた。

「どこだい？」

暗い部屋の中、耳を澄ませてその寝息を探つた。  
そして見つけた。

美里はベッドのそばの床の上に、毛布も持たずに転がつていた。どうやら暑くて寝返りを打つた拍子にベッドから落ちたらしかつた。昔からあまり寝相のいい方じゃなかつたけど、まさかベッドから落ちるとは思わなかつたね。しかもそのまま寝てるし。

僕は妹をベッドに戻そつか迷つたけど、あまりにも気持ちよさそうに寝てたから、僕は毛布を持って彼女の隣に行き、一緒に床で眠つた。フローリングの床はひんやりとして気持ちよかつた。

そのとき僕は、なんだかとても幸せな気分だったな。うまく説明できなけれど、なんだかとも、幸せな気分だったんだよ。

朝、すごい音がして僕は目を覚ました。その瞬間目に入ったのは、驚いたね、美里の寝顔だった。あいつ、僕の上に乗つかつて寝てたんだ。どおりで息苦しいと思つたよ、起きた瞬間。

ベッドの横の床の上、僕らは折り重なるようになつていた。目覚ましは少しばけめつてくらい忙しく鳴り続けていた。美里はそれでもまだ眠つていたね。

僕はその状態から思いつ切り腕を伸ばして目覚ましを止めた。もう一度美里を見て、また目覚ましを見た。

「ま、いつか…」

授業初日のその日、僕は学校に遅刻した。

僕と美里は部屋で2人、そもそもそと大家さんの用意してくれたトーストを食べた。とっくに1時間目が始まつていて時間だつたな。ちなみに大家さんは起こしに来てはくれないよ、当然のことながら。美里も朝は苦手で、たまにトーストを落つことしそうになつていた。

「お兄ちゃん学校行くけど、美里はどうする? 部屋で待つておくかい?」

大家さんはこの時間仕事でいなかつた。もちろん他の下宿生もいるのは僕と美里だけだつた。

「大家さん、お昼には一度帰つてくると思うけど、それまで1人で大丈夫かい?」

寝ぼけ眼の美里は、半分夢の中にいる感じで、「うん」と答えた。

「どうか」

2人揃つて5時間ばかしかけて朝食を終えると、僕は学校に行く準備をして玄関に立つた。美里がそれを見送つてくれた。

「本当に1人で大丈夫なんだね? なんなら僕が残つて」「子どもあつかいしないでつてば。平気だよ」

美里は膨れてこっちを上目遣いでにらんできた。その仕草がまた子

どもっぽかつたけび。

「そうだつたね、じめん

「僕は妹の頭をポンポンと叩いた。

「それじゅ、行つてくむ

「いつてらつしゃい、お兄ちやん!」

美里は目一杯笑つて手を振つた。

そして僕はドアを閉めたんだけど、その途端に後悔したね。びづせ  
このあと学校に行つても、憂鬱になるのは分かつたんだから。

僕は河原の道をなるべくゆきく歩きながら、学校に向かつた。

学校に着いたら授業中だった。時間的にたぶん2時間目。僕は教室には行かず、階段を昇つて屋上に向かった。けど、屋上に出るためのドアには鍵がかかってて、僕の持っていた唯一の希望は打ち砕かれちまた。前にいた高校の屋上には自由に行けたんだけどね。仕方なく僕は男子トイレに入つてタバコに1本火をつけた。僕はね、びっくりするくらいタバコを吸うんだ。1日に20本くらい吸うんじゃないかな。唯一の趣味なんだよ。

タバコを5・6本ふかしながら、僕は授業が終わるのを待つた。授業の途中で教室に入つて、クラスの注目を浴びることほど嫌なことはないよ、本当。

2時間目の終了を告げるチャイムが鳴つて、僕は男子トイレを出た。廊下は既に授業を終えた生徒たちでごつた返していた。疑うことなくみんな1年生で、僕より2つか3つ年下だ。

僕はその人混みの中をかき分けて、自分のクラスに入つた。特に変わったところのない、普通のクラスさ。

僕は自分の席に座つてカバンを置くと、そのまま机に突つ伏して寝た。いや、もちろん本当に寝ちまつたわけじゃない。でもこうしておけば、誰とも口を利かずに済むだろう？幸いにして僕の席は教室の右端の一番後ろだから、誰も僕が来たことに気付きもしなかつたかもね。

教室はがやがやと騒がしくて、うるさいことこの上なかつたな。時々誰かがバカみたいな奇声を発して、それに反応してまた誰かが、これまたバカみたいな笑い声を上げていた。そういうのつて、瘤に障らないか？

授業が始まつて、担任の教師が黒板の前で自己紹介を始めた。そして、君たちは試験を切り抜けた優秀な生徒だとか、君たちが受かったのだから誰かがこの学校に落ちているんだとか、どこででも聞く

ようなことを語り始めた。

優秀な生徒か！じゃあ僕が合格したのは何かの間違いかなんかだつたんだろうな。それに、何人かの人間を犠牲にして僕たちが合格したっていう考えはあんまり好きじゃないね。いや、確かにその通りなのかもしないけど、でもそんなこと知つてどうなるんだい？それを聞いて、「そいつらのためにも頑張ろう」なんて考える奴なんていやしないよ。人間、自分のことしか考えないもんさ。

例えばだよ。君は自動販売機でジュースを買うとき、「このお金があればアフリカで病気に苦しむ子どもが3人助かる」なんてこと考えるかい？考えるわけないよ。そんなんだよ、人間は別に責めてるわけじゃないけどさ。

ああ、関係ないけど、担任の教師は遅刻して3限目から出てきた僕に対して何も言わなかつたよ。それはそれでありがたかったけどね。教師の自己紹介の後は案の定僕たち生徒の自己紹介だつた。これは本当に厄介だよね。だってそ娘娘？そのクラスの中で、いや、その学校の中でダブつてるのはきっと僕だけだつたのだもの。

僕の番になつて、僕は黒板の前に立つた。やばいね、吐きそうになつたよ。クラス中の好奇の視線が僕に集中するんだ。中には隣のやつとヒソヒソと話をする奴なんかもいてさ、気が滅入つてしまつたなかつたな。もちろん僕は他の何人かの奴らと違つて目立とうなんて考えなかつたから10秒もかからずに終わつたんだけど、それでもその時間は苦痛だつたな。そして1番の問題は、この自己紹介つてやつはそれぞれの教科、国語とか数学とかの最初の授業に必ずさせられるつてことだ。ほんと、厄介だよ。

それで担任がHRを始めたわけだ。クラスの係を決めたりとか学級委員長を決めたりとか。興味もないね。僕は1番楽そうな、仕事のなさそうなのを選ぼうと思つたんだけど、悲しいかな、クラスの不良っぽいのが先に取つちまいやがつた。こういうのは声と態度のでかいやつの勝ちらしい。結局僕が選んだのは、というか残つたのが自動的に僕のになつたんだけど、国語の教科係かなんかになつ

たんだ。国語の教員に次の授業で使うものとかを訊きに行く係らしかつた。もう1人クラスの中でも目立たない感じの女の子がその係になつてたけど、哀れにも彼女は1人でそのめんどくさい係をするハメになつちまつた。僕が1度もその仕事をやらなかつたからね。H.R.の後は授業だつたんだけど、授業の中身 자체は、そうだな、普通だつた。教師が教科書に書いてあることを喋つて、生徒がそれをノートに写す。な、普通だろ？でも僕はこの普通の授業が大嫌いなんだよ。退屈だし、何よりちつとも面白くない。僕は頭も悪いしね。僕は特に何もすることなく、その日の授業を終えた。こんなのが毎日あるのかと思ったら、気が狂つちまうそうになつたよ。

放課後、僕はいつものようにバイト先に行つて、下宿先にはいつもと時間、9時だよ、に帰った。その日はバイクじゃなかつたから、足が大いに痛かつたし、早足だったから息が上がつてたな。僕は体力が全然ないんだ。タバコの害だよね、明らかに。中に入ると、いつものように大家さんがいた。

「お帰り、圭介くん」

大家さんのいつもと変わらない笑顔。いつもならここで僕は会釈して部屋に行くんだけど、その日僕は大家さんに言わなきゃならないことがあつたんだ。とても大切な話が。

「あの……」

「なに?」

普段僕から話しがれることなんてほとんどなかつたんだけど、大家さんの反応はとても自然だつた。

「あの、美里を、妹をここに住ませても構いませんか?」  
ただでさえ家賃を滞納してるので、なんて厚かましいお願ひなんだつて、自分でも分かつてたよ。けどここは大家さんにお願いするしかなかつたんだ。

大家さんは軽く握つたごぶしを口に当て、クスクスと笑つた。

「そんなに頭を下げなくとも大丈夫よ。ここにあの子を住まわせることに問題はないわ」

いや、なんて言つていいのか分からなかつたよ。でも、なんだか嬉しかつたな。

「あ、ありがとうございます。でも、迷惑じゃないですか?それに、お金とか……」

「いいのよ、お金の心配はしなくて。それに……」

その時僕は、大家さんがまた目を細めるのを見た。美里の頭を撫でてたときと同じように、それは悲しげで、寂しそうな表情だつた。

「あの子がいると、私も嬉しいから…」

部屋に戻ると、美里は朝と同じ格好、つまり僕のパジャマを着て、ベッドに腰掛けでテレビを見ていた。僕はこの部屋のテレビがついてるのを、その時初めて見たな。驚くかもしれないけど、僕はほとんどテレビを見ないんだ。よっぽど、それこそ死ぬほど暇なときくらいしかテレビを見ないんだよ。これはきっとみんなには理解できないようなことかもしれないけど、そうなんだ。だつて大抵どのチャンネルでも毒にも薬にもならないような、クダラナイことをやつてるだらう？ そしてそこで芸能人なんかが笑つたり泣いたりしてると、それって、僕にはどうしても受け入れられないことなんだよ。なんだか、全部嘘つぱちに見えちまうんだ。うまく説明できないけどさ。そこにいる芸能人やなんかは、みんな嘘つきで仮面を付けて、表裏を使い分けてるんじゃないかなって疑つてしまふんだよ。それはきっと当然のことかもしれない。いや、きっとそれが当然のことで、みんなそれを知つた上で見てるんだ。けど、やっぱり僕にはそれが受け入れられなくてさ。うん、なんだか説明するのが難しいけど、とにかく、僕はテレビをあんまり見ないってことさ。それで、美里はテレビを見ていたわけなんだけど、僕に気付くと、「おかえりなさい！」

と言つて駆け寄つてきたんだ。僕は抱きついてきた妹の頭を撫でながら訊いた。

「1人で大丈夫だつたかい？」

「大丈夫だつた」

「お昼は？」

「おばちゃんが2時すぎに帰つてきたから、一緒に食べた」

「大家さん」

「でね、大家さん、とっても料理が上手なのよ。お昼はスペゲティを食べたの。とてもおいしかったよ。ソースも大家さんが自分で作つたの」

妹は目を輝かせながら、その日一日の報告をした。

「それで、それでね、午後からは少しおしゃべりをして、大家さんがお買い物に行くから、私も来るかって訊いたの。でも、私行かなかつたの」

「どうして？」

「えっと、私、ちょっと眠かつたからね、部屋でお昼寝をしてたの」「よく眠れた？」

「うん。とっても。それでね、夕方に大家さんが帰ってきて、2人で夜ごはんのハンバーグを作ったんだ。私、とっても上手だつて、ほめられちゃつた」

「それはよかつたね」

「えへへ」

妹は照れたように笑つた。その笑顔には一見の価値があるぜ。

「お兄ちゃん、夜ごはん食べた？」

「いや、まだだよ」

これは嘘だつた。本当はバイト先で売れ残つた弁当を食べていたからね。けど妹の期待を裏切るようなことをしちゃいけないだろ？

「じゃあ、持つてくるね！」

妹は飛び跳ねるみたいにして、階段を降りていつた。いやまったく、可愛いもんだよ。

その日僕は結局2回も晩飯を食べるハメになつた。ハンバーグの味がどうだつたかは、よく覚えていない。

僕は油断していた、と言つより忘れていたんだけど、その日も前の日みたいに美里と風呂に入ることになった。別に嫌ではないんだけど、どうしたものかね。

湯船に2人並んで浸かっていると、美里が思い出したみたいに話しかけてきた。

「お兄ちゃん、明後日ヒマ?」

「明後日?」

明後日は土曜日、学校は休みだった。もつとも、美里は年中休みだけどね。あ、ちなみに美里の学校からは何も連絡が入ってこなかつたんだ。その時の僕にはそれがなぜかは分らなかつたけど。

「何があるのかい?」

「別になんにもないよ」

「は?」

僕は訊き返した。すると美里は僕を見ずに、

「何もないから、どこか行こうよ」

と言つた。

「あ、ああ、そうだね。どこがいい?」

妹はしばらく細い身体をカクカク揺らしながら考へて、やがて、「お買い物」と答えた。

「わかった。じゃあ土曜日はお買い物な

「うん!」

それから先、僕たちは週末の度に出掛けれるよつになつた。買い物はもちろん、公園やら近所の貧相な動物園やら。遊園地には行かなかつたな。あの子があの子なりに気を使つたのかもしれない。それでも移動費ぐらいの出費はそれなりにかさんだけど、美里の笑顔を見たら、そんなことどうでもよくなつた。

次の日、僕はまた遅刻しながら学校に向かつた。別に急いだりしないさ。むしろ行きたくないくらいだからね。金曜日っていうのが救いだつたよ。

その日もいつも通り、僕は授業中も休み時間もずっと机に突つ伏していた。席を立つたのはトイレと昼飯を買いに行つたときだけだった。

今日もいつも通りだつてそのときは思つてたんだけど、実はこの後、ちょっとした事件があつたんだよ。いや、事件というのは少しオーバーかもしないけど、それでも、僕にとつては事件だつたんだ。

火曜日の6時間目は毎週数学だった。僕は勉強の中で、一番数学が嫌いなんだ。しかも嫌いな上に全然苦手ときたもんだからタチが悪い。中学まではむしろ得意な方だつたつてのに、高校に入つて急に難しくなつてさ。それに高校の数学つてのは聞いても意味が分からないし、将来何かの役に立つなんて全然思えない。それは今でも変わらないな。

そんなわけで僕は例によつて机で狸寝入りしようとしてたんだけど、その日ばかりは違つた。

「あの…すみません」

蚊の鳴くような声つて言つだろ？それはまさにそんな声だつたな。僕が振り向くと、隣の席の女子が身を縮めて、また蚊の鳴くような声で、

「あの…あの…その…教科書を忘れてしまつて…。だからその…」と言つた。クラスの中で誰かに話しかけられたのは初めてだつたな。まあ、なんとなく話は分かつたから、

「いいよ」

と僕は答えた。

「あつ、その…ごめんなさい…」

女子は小さな身体をさらに小さくして、ほとんど聞こえないような声を出した。僕は努めて優しく言つたつもりだつたんだけど。ま、仕方ないさ。

彼女はおずおずといつた調子で机を寄せてきた。けど僕は机と机がくつつく前に、数学の教科書を彼女の机の上に置いた。

「え？ あ、いや…」

女子は混乱してたな。普通机くつづけて真ん中に置くもんな。

「いいよ、別に」

僕は言つた。もちろん、努めて優しく。僕だって、女の子には優し

くするや。

しかし彼女は消えそうな豆電球みたいになつていたな。

「でも…」

「いひつて。俺が持つても意味ないし  
いやあ、女の子と話すのつて緊張するよ。僕の場合、女子と話すの  
は田尾先輩以来だつたからさ。

「あの…ごめんなさい」

そう言つと彼女は机を動かすのをやめた。机は中途半端な位置で止  
まつた。

授業が終わつて、僕が帰る準備をしていると、その彼女が話しかけ  
てきた。最初はどうしてか分からなくて驚いたけど、教科書を貸し  
たことを思い出した。一眠りしてたんだ、僕。

「あの、岩海くん…その、ありがとうございました…」

「いや、別にいひつて」

「ごめんなさい…」

「いや、なんで謝るの?」

「え?あ、いや、その…、ごめんなさい…」

正直、この子は頭が少し足りないんじやないかつて思つたね。とこ  
かく何につけても謝るんだよ。

まあそれは冗談として、僕は泣きそうな顔をした彼女がかわいそ  
になつて、話を変えた。

「敬語とか使わなくていいよ。同学年なんだし。えつと…」

ここまで会話しといて、相手の、しかも同じクラスの奴の名前を知  
らないんだから、僕もなかなかのもんだったよ。

「岸本です…。岸本沙織です」

「あ、ごめん!」めん

彼女はやつと、じにに来て初めて笑つた。

「それでは…」

岸本さんはお辞儀をして、友達であろう女子のグループの中に帰つ  
て行つた。

僕はいいことをして、少し気分が良かつたな。そして少しはこれからの学校生活がマシなものになるんじゃないかなって、勝手に期待したんだ。

少しだけ季節が過ぎて夏になつたときの話さ。その年の夏はすゞく暑くてさ、学校に行くのがますます憂鬱になつてきてたな。

学校の方だけど、あれから時々岸本さんと話をするようになつたんだ。けどどうして僕みたいなつまらない人間に話しかけてくるのか、僕なんかと話してて何が面白いのか、全く分からなかつたな。話したことはよく覚えていない。でもたぶん、すごくどうでもいい、他愛もない話をしたんだろうな。今日は暑いですねとか、この問題難しいですねとか、兄弟はいるんですかとか。けど、それが唯一、僕が学校で話をする時間だった。

私生活の方は、バイトを1つ増やした。だから時々帰るのがすぐ遅くなつて、夜中の11時頃、美里が眠つてしまつてから帰ることが多くなつた。僕たちがまともに話をする時間は朝と仕事のない週末に限られるようになつていつたけど、それでも美里は僕によく懐いていてくれたし、週末の度にどこかに出掛けた。

そういうえばこんなことがあつたな。

7月に入つて間もない日の朝、僕がベッドで寝ていると、誰かが僕の身体を揺すり始めたんだ。

「起きて。ねえ、起きてつてば！」

「うへん？」

僕は眠い目をこすつて僕を起こした人物、美里を見た。見たんだけど、いやなんて言つのかな、そのまま固まつちまつた。彼女は学校指定の水着姿でそこに立つていて、腰にはでっかい浮き輪をはめていた。そしてふくれつ面で僕を見下していたんだ。いや、本当に参考たよ。

「どうしたんだ、その格好？」

なんで妹が朝っぱらからそんな妙ちきりんな姿をしていたのか、僕には全く理解できなかつたな。でも美里は逆に不思議そうな目で僕

を見て、「あーー！」と声を漏らしたんだ。

「お兄ちゃん、昨日プールに行くって約束したじゃない！」

「ああ、そういうこと言ひてたなと僕はぼんやりと考えた。でもだからって、朝からその格好はないんじゃないかな？せめて服を着てほしかつたね。

「昼からじやダメ？」

僕はそう訊きながら、やつぱりダメなんだろうなと思つた。彼女は素直じやあるけれど、妙なところで強情だからさ。

「ダメ！今から行くの！お昼から行つたら人がいっぱい泳げないでしょ？」

美里の予想通りの答えにがっかりしながら、僕はいそいそと準備を始めた。美里はそれまでとは打つて変わって、ニコニコしながら僕を待つっていた。

まだ午前中だつてのに、プールには既にたくさん的人がいた。僕は水着を持つてなかつたから、プールサイドに設置されたテントの下で、美里が遊ぶ姿を眺めていた。

美里の泳いでいたプールはあんまり深くない、小学生用のプールで、美里と同じか、それよりちつちつな子たちがたくさん泳いでいた。プールの中ではしゃぐ美里の濡れた白い肌は、強い陽射しに照らされて眩しく輝いていた。その姿はまるで一枚の絵画を彷彿とさせたね。賭けてもいいけど、あのプールにいたどの子よりも美里は可愛かつたぜ。ひいきとかじやなくてさ。

テントの下の日陰にいたとはいえ、コンクリートのプールサイドはかなりの暑さになつていて、朝たたき起こされたのも相まって、僕は次第に眠くなつてきていた。

「そういうや……」

薄れゆく意識の中で、僕はあることを思い出していた。

「そういうやあの屋上も、こんな感じだつたよな……」

デジヤブのような錯覚を覚えながら、僕は2年前の夏の記憶に引き込まれていった。

僕は学校の屋上つていうのが好きだ。誰もいないし、いつも気持ちのいい風が吹いていたから。

前の高校に入学してすぐ、僕はその場所を見つけた。そこには自由に出入りできて、しかもまじめな進学校だつたから、授業中に限らず、その屋上には誰もいなかつた。

そここの高校でも授業を受けるのは退屈だつたね。みんなよくもまあ、あんな拷問みたいなものに耐えられるな。言葉は悪いけど、正氣じやないね。吐き気がするよ。だから僕は授業中ずっと、その屋上で

タバコを吹かして過ごしていたんだよ。

そういうや、タバコを吸い始めたのもちょうどその頃だつたかな。なに、別に大した理由はなかつたんだ。正直、タバコをかっこいいとは思つてなかつたし、特別おいしいとも思わなかつた。けど、僕は恐ろしく無趣味な人間でね、本も読まないし音楽も聴かないから、サボつてゐ間死ぬほど暇だつたんだよ。だから時間を潰すためにタバコを吸い始めたんだ。

それで僕は授業があつてゐ間ずつと、屋上の日陰でタバコを吹かしていわけさ。

その屋上には何にもなくつてね。あるのは貯水タンクくらいで、あとは周りをぐるつと囲んでいるフェンスぐらいだつた。まあ、それが僕がそこを気に入つてゐる理由だつたんだけどね。

屋上からの眺めは、そうだな、そこそこよかつたと思つよ。それほど都会でもなかつたから高いビルなんかはなかつたし、住宅街やら、小さい森なんかがまばらに見えるくらいだつた。

でもね、気に入らないところもあつたんだ。それはね、いつも上に見えていた青空だつた。もし君がさ、青空の好きな人間ならば謝るけど、僕は青空つてのが嫌いなんだ。苦手つて言つた方が正確かもしないな。中でも、雲一つない青空なんてのは見てて頭が痛くなつてくるね。こういう話をすると、みんな僕のことをクレイジーな奴だつて思うだらうな。実際そうなんだろうさ、僕は。でも僕から言わせてもらえば、空が青いことの方が、僕にとつては不自然極まりないことなんだ。なんで誰も、空が青いことに疑問を持たないんだ?言つとくけど、僕は光のスペクトルがどうとか、そんな話をしてゐんじやないんだぜ?どうして誰も、空が青いことに違和感を覚えないかつて話をしてゐんだ。分つてるよ。狂つてゐるのは僕の方だつてことぐらこさ。でも、それでもやつぱり、僕は青空が好きになれないや。

そしてあの夏の日、夏休み間近の7月だつたと思つけど、僕はその日もその屋上にいた。

その日も夏らしい、バカみたいによく晴れた日で、僕は少し憂鬱な気分でタバコを吹かしていた。誰もいない屋上。静かに過ぎていく時間。どこにいたって、僕にはどうでもいい時間だった。

「あー、いけないんだ」

僕しかいないはずの屋上で声がした。

「高校生はタバコ吸っちゃイケないんだぞー」

屋上の入口に、女生徒が一人立っていた。上履きの色から察するに3年生。ニヤニヤしながら僕を見ていた。

僕はタバコを隠そうともしなかったし、言い訳をしようともしなかつた。やつても意味がないって分つてたし、なんとなくあきらめてもいたしね。もしかしたら誰かに見つかるのを望んでいたのかもしない。

女生徒は僕の前に来てしゃがみ込んだ。まだニヤニヤしてた。けっこう美人だなって、僕は見当違いのことを考えてたな。

不意に彼女は手を伸ばし、僕の口からタバコをひつたくると、それを自分で吸い始めた。そして身を滑らせるように僕の隣に来ると、そのまま何も言わず、ぼんやりと青空を眺めだした。

僕はしばらく、そんな彼女を眺めてから、もう1本タバコを取り出して、一緒に青空を眺めた。不思議と嫌じやなかつたな。やがて彼女がポツリと言つた。

「雨、降らないかな…」

それが僕と田尾先輩の、初めての出合いだった。

僕が屋上で出会った上級生の女子は田尾と名乗った。下の名前は訊かなかつたな、そりいえば。

田尾先輩とはその日からほぼ毎日、その屋上で会つた。でも特に何をしたつてわけでもなくて、ただ並んで座つて、ずっとタバコを吹かしてゐるくらいだつた。たまに先輩が持つてきてた音楽プレイヤーで曲を聴いたりもしてたな。全然知らないアーティストの、聞いたことのない曲を一方的に、半ば強制的に聴かされてたよ。どうも先輩のフェイバリットだつたらしい。田尾先輩曰く、「あんまり売れてないロックバンドの曲」なんだそうだ。正直、僕は好みじやなかつたね。

僕らのそんな屋上で田々は夏休みが明けても続いた。田尾先輩が3年生だつていうのはさつき話したと思うけど、普通受験生つてはそんくらいの時は勉強してるもんじやないのかな?

「先輩は受験とかしないんすか?」

ある日僕は先輩にそう訊いてみた。田尾先輩はその時僕の隣で、持つてきたプリントかなんかを丸めたり投げたりして遊んでいた。

「あー、受験ねー。どーしようかなー?」

先輩はプリントで作つたボールを投げた。ボールは大した距離を飛ばすに落ちた。

「なんか、かつたるいんだよねー」

「行きたい大学とかないんすか?」

忘れてるかもしないから言つとくけど、その高校は一応進学校なんだ。中学までは勉強ができたんだぜ、これでも。

「うーん、ないなー。つか、別にどーでもいいや」

田尾先輩はいつだつて投げやりで無氣力だつた。それでいつもフラしてゐる印象があつたな。

「後輩くんはなんかあんの?」

「へ？」

「し・ん・ろ」

田尾先輩はカバンの中に詰め込まれてたプリントの束からまた1枚抜き取つた。A4サイズの上白紙。なんか赤い印鑑みたいなのが見えたけど、次の瞬間にはボールになつていた。

「俺ですか？：ないなあ…」

「まあ君はまだ1年だからね。あたしは3年だから親とか先生がもうつるさくつてさー。あはは、困っちゃうよね」

そう言つて彼女は笑つた。本当、彼女は笑うのがとても上手いんだ。もちろん作り笑いなんかじゃない、本物の笑顔がさ。

ひとしきり笑つて、彼女は続けた。

「でもあれだよね。人生、そんな悩んでても仕方ないじゃん？人生なんて遊びみたいなもんなんだし」

「遊びっすか？」

「そう。人生なんて、生まれた時にもらつたおまけみたいなものだよ。遊びだから真剣じやない。遊びだから誰も期待しない。遊びだから失敗してもあきらめがつく。そうでも思つてないとやってらんないでしょ？」

彼女はそう言つて、またプリントでできたボールを放つた。今度はフェンスまで届いて、当たつて落ちた。

「そんなもんすかねえ…」

僕はタバコをくわえながらそう言つた。

人生は遊び。確かにそうかもしれない。でもそれは、どこか寂しい気もした。

「先輩はさ…」

「ん？」

「先輩は夢とかある？」

我ながらダサいことを訊いたもんさ。行つて首を絞めてやりたいね。よっぽどセンチな気分になつてたらしい。

「なになに？ 今日はやけにあたしに質問ばっかしてくるね？ もしか

して惚れた？」

意地悪く笑つた。僕は恥ずかしくなつて目をそらした。普段はそんなに意識してなかつたけど、彼女は美人だから、よけいに緊張するんだ。

「別に答えたくないならいいですよ。忘れてください」

「あは、可愛いな君は」

先輩はニヤニヤしつぱなしだつた。人をからかうのが好きなんだ、彼女。

それで彼女は、ちょっと首をかしげて、さつきの僕の質問について考えだした。

「そだねー。あるつちゃあるかな？」

「へえ。なんすか」

と僕は訊いた。

「えー、絶対笑うつしょ？だから言わない」

「じゃあいいつすよ」

「そんな風に言われるとなー。…聞きたい？」

「それなりに」

「ふふん、誰にも言わないでよ」

彼女は柄にもなく顔を少しだけ紅くしていた。そんな先輩を見たのは、その時だけだつたと思つ。

「誰に言えつてんですか、そんなこと」

「あはははは！ そうだよね。じゃあさ、耳貸して」

別に周りには誰もいなかつたんだけど、どうにうつもりか、田尾先輩は僕の耳元に顔を寄せて、その言葉を、彼女の夢を囁いた。

それはとても意外で、それでいて先輩にすごく似合つている。そんな感じだつた。

「え？」

僕は思わず声を上げていた。だつて、本当に意外だつたんだからさ。

「なに？ そんな顔しなくてもいいじゃない」

先輩は不機嫌そうに顔を歪めて、でもすぐに笑つた。

「ま、マジで考えてるわけじゃないんだけどねー」  
彼女は屈託のない笑顔を見せた。先輩はそう言つたけど、きっと、  
本気だつたんだろうな。

次の日から、先輩は屋上に来なくなつた。授業をまじめに受けける気になつたのか、それとも学校自体に来なくなつたのか分からなかつたけど、たぶん前者だと思う。その時はもうすっかり夏が終わつて、地球は秋を忘れたみたいにバカみたいに寒くなつていていたな。僕は屋上の風の当たらない物陰に隠れて、1人でずっとタバコを吸つたりぼんやりと過ごしていた。

別に寂しくはなかつたさ。僕がそんなところにいても心配するような友達はいなかつたし、先生たちだつてそんな生徒のこと、そりやあ最初は気にかけていたかも分かんないけど、無視することを決めてたらしかつたからね。

田尾先輩が来なくなつても、僕はずつとそこにいた。田尾先輩といつて、何か話をしたりすることは稀だつた。いつも2人とも黙つてたからさ。でもね、それは嫌な沈黙じやないんだ。教室やなんかの沈黙とは違うんだ。うまく説明できないのが残念だけど、分かつてほしいな。

それから冬休みも明けて、すぐに2月になつた。僕だつて冬のクソ寒い中ずっと屋上にいるわけにもいかなかつたから、たまには教室に顔を出した。机に座つてずっと窓の外を眺めている僕に話しかけてくるような奴はほとんどなかつたけど、時々、だらしなくていやらしい目をした頭の悪そうな奴が、仲間を2、3人引き連れて話しかけてきたことがあつたな。完全に人を見下した感じの、いやらしい連中がさ、僕に話しかけてくるんだ。僕はいつもシカトしてたんだけど、いや、ああいうのつて本当に人を憂鬱にさせるね。奴らはそういうのが得意なんだよ、生まれつき。はつきり言つてさ、ああいうのはみんな死んじやつた方がいいと思うね。もちろん僕にそんな度胸はないんだけどさ。ケンカとか嫌いなんだ、僕。

そんな感じで僕の憂鬱な日々は過ぎていつて、卒業式の日になつた。

もちろん僕のじゃなくてさ。

1年生は卒業式に参加する必要がないからその日は休みだつたんだけど、僕は呼ばれてもないのに学校に行つた。誰もいない校舎を抜けて、屋上に昇つたんだ。

そしたらやつぱり、田尾先輩はそこにいた。田尾先輩はフェンス越しに外を見ていたけど、僕に気付いて振り向いた。

「…卒業式、行かなくていいんですか？」

こんなところで何をしているのかつて僕は訊いた。おかしな話さ。僕は田尾先輩がそこにいることを期待してそこに行つたんだし、田尾先輩だつてきっとそれを分かつてたんだからさ。

先輩は笑つていた。でもいつもと違う、湿つた笑顔。

「後輩くんさ、いつかあたしに訊いたよね。夢はあるかつて」

僕は答えなかつた。先輩は続けた。

「あたしね、ずっと逃げてる気がしてた。言い訳して、隠して、何度も何度も自分をだましてた。でもね、もう、そんなの、嫌なんだ…」  
冬の曇つた空の下、冷たい風が吹いていた。先輩を、初めて遠くに感じた。

先輩はフェンスの方に顔を向けて、ずっと遠くの方を見ていた。

「あたしね、東京に行くんだ」

「…」

「そこがさ、あたしの夢が叶えられる場所だと思つんだ」

「…」

先輩が僕の方に歩いてきた。うつむいたまま、僕の前で立ち止まつた。

彼女は、僕に何かを期待してたんだと思う。僕は何かをすべきだつたんだ。気の利いた言葉のひとつでも掛けたり、抱きしめて、キスのひとつでもすればよかつたんだ。田尾先輩が何を考えていたにしろ、僕は、そうすべきだつたんだ。でも…。

「…頑張つて下さい、先輩…」

それしか言えなかつた。何もできなかつた。本当に僕は、何を考えていたんだろうな。  
苦しい沈黙だつた。僕と先輩の間に、コンクリートでも流し込んだみたいに。

「うん…頑張るよ…」

先輩がうつむいたまま言つた。ああくそ。今すぐ自殺したい気分だつたね。

その時不意に、先輩が顔を上げて、顔中にニカッと笑いを広げた。  
「ま！そういうことだから、君もこれから頑張るんだぞ～」

それが無理やり作った笑顔だつて、僕は知つていた。でも僕は、何も言えないでいた。

「じゃあね！」

先輩は僕の横をすり抜けて、階段を駆け下りていつた。両手を広げて、スキップしながら、悲しそうな背中をして…。

取り残された僕はしばらく屋上で突つ立つていた。どれくらいそこにいたのかは覚えていない。ただ、風がとても冷たかつたつてことは覚えてる。

正直なところ、僕は先輩をどう思つてたんだろう。好きだつたかもしない。嫌いだつたのかもしない。分からいや。でもひとつ分かっていたのは、彼女が、田尾先輩がすごく自分に似ていたつてことさ。どこが似てたなんて、そんなことは訊かないでくれよ？自分でもよく分かつてないんだからさ。先輩は僕にすごく近くて、すごく遠い存在だつたんだと思う。だから、僕は先輩のことがすごく好きでもあつたし、同時にすごく嫌いでもあつたんだと思う。分からないな。やっぱり僕には全然分からないや。それでもこの思いは、僕の中ですつと、ぐるぐると回り続けていたんだ。

声がして、僕は田を覚ました。そしたら、田の前に美里がいた。

「お兄ちゃん？」

なぜか美里は心配そうな顔をしてたな。僕はプールサイドのテントの下で寝てただけなのにさ。でもそのわけはすぐに分かった。

「お兄ちゃん、泣いてるの？」

「え？」

目をこすつたら、涙が指に触れた。僕は夢を見て、泣いてたみたいだった。まったく、あんな夢を見るなんて、未練がましいにもほどがあるね。

「ああ、そうみたいだね。なんでだろ？」

僕はそう言いながら、改めて美里を見た。彼女はまだ不安そうな顔をしていた。

ここで僕は、美里の後ろに立っていた、水着姿の小さな子どもたちに気付いた。男の子と女の子、兄妹だと思った。なんとなく。

「美里、その子たちは？」

僕は訊いた。美里はまだ少し心配そうな顔をしながらも、僕の質問に答えた。

「さつきそこで一緒に遊んでたの。アキヒロくんとレイカちゃん」

僕が2人を見ると、2人は可愛らしく美里の後ろに隠れた。

美里のすごいところはね、誰とでもすぐに友達になっちゃうところなんだ。本当、会つてすぐに友達になれるんだよ。そして彼女はとても面倒見がいいんだ。とても優しいんだ。

「それでねお兄ちゃん、お金貸してくれない？」の子たちが喉が渴いたつて

「うん、もちろんだよ」

僕は美里に3人分のジュース代を渡した。こつこつ子どもたちのためなら、僕はいくらだってお金を出せるね。本当の話や。

美里はその兄妹を連れてジュースを買いに行った。その姿を見送りながら、僕は、「本当にいい子に育つたな」なんて恥ずかしいことを考えていた。

美里たちが帰ってきた。兄妹は1本ずつジュースを持つていて「機嫌だった。『お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう』なんて言つちやつたりしてさ。そして2人は手をつないで、たぶんだけど親のところに帰つていった。

その時美里が、自分の持つていたジュースを僕に差し出してきた。

「はい、お兄ちゃん」

これには参つたね。彼女、自分の分じゃなくて僕の分を買つてきていたんだ。彼女はそういう子なんだよ。いつも周りの人間のことを気遣つていて、自分を犠牲にするんだ。10歳の子供がだぜ?この1週間前だつて、彼女、風邪を引いたことを黙つてたんだからさ。僕に迷惑をかけないために。

「いいよ、僕は。それは美里の分だよ。美里がお飲み」

そう言つても、彼女は聞かないんだ。

「お兄ちゃん、ずっとここにいたんでしょう? 今日はとても暑いんだから、飲まなきやダメよ」

「でも、それはお前のじやないか」

「私はいいの。お願いだから」

美里から「お願い」なんて言われた田にや、飲まないわけにはいかなくなつたね。彼女の「お願い」は強いんだよ、すつぐ。

「分かつた。じゃあ2人で分けよう」

「うん!」

とは言つたものの、彼女は自分が先に飲むことを承知しなかつた。さつきも言つたけど、けつこう頑ななところがあるんだよ。

それで僕は先にジュースを一口飲んだ。その後それを美里に渡して、ようやく彼女はジュースを飲んだわけさ。

2人で並んで座つてる間、美里はさつきの兄妹のことを、やつぱり兄妹だつたんだけどさ、僕に話してくれた。兄のアキヒロくんはサ

ツカーをしてるんだとか、妹のレイカちゃんはすごく恥ずかしがり屋さんなんだとか。彼女はすごく楽しそうだったな。きっと久しぶりに同じ年頃の子たちと遊んだからだろうね。美里はいつも部屋で一人ぼっちだつたからさ。

昼になつて、僕たちは適当なファーストフード店に入つて昼食をとつた。そこでいろいろと話をしたわけだ。

「そういえば美里。風邪の方はもう大丈夫なのか？」

「うん、もうすっかり治つたよ。ありがとう」

「それならいいんだけど、少し顔が青白いよつた気がしてさ」

「平気。ちょっと寒かつただけ」

「まったく、それでよくプールに行こうなんて言えたよな」

「えへへ」

「それにさ、美里最近おなかの調子でも悪いのか？たまにおなか押さえて気分悪そうにしてるけど」

「それは… それは大丈夫よ」

「なんで？ 何かあるならちゃんと言えよ。もしかしたら悪い病気かもしれないし」

「平気だつて」

「そうは言つけどさ。一応病院に

「平気だつてば！」

いやはや、女の子と話すのは難しいね。こいつちが心配してんのに、逆に怒られるんだからさ。誰か女の子の心理学の本でも出せばいいんだよ。きっと売れると思うから。

午後もひとしきりプールで泳いだ後、僕たちは夕方近くになつて部屋に戻つた。プールまではちょっと距離があつてさ。美里は僕のバイクに乗りたがつたんだけど、僕は乗せなかつた。妹をバイクには乗せないつて、心に決めていたんだ。ついでに言つと、僕は美里の前ではタバコを吸わないようにしていた。

部屋に戻るなり、美里はベッドに飛び乗つて、パツタリと倒れ込んだ。よつほど疲れていたんだろうな。そのまますぐに寝ちまつた。

週末の度に僕と美里は出掛けっていたんだけど、毎回美里はそつやつて遊び疲れて寝ちゃうんだ。たまには僕も部屋でゆっくりしたかったんだけど、それは仕方ないね。

僕は美里に毛布を掛けた。すごく幸せそうな寝顔だったな。あまり体力がないくせして、いつもぶつ倒れるギリギリまではしゃぎまくるんだからさ。

それをしばらく眺めていたら、美里が小さな声で何か言つた。よく聞き取れなくて、僕は耳を近付けてみた。

「…………」

寝言みたいだつた。

「…………ちゃん…………なさい…………」

美里はそれ以上何も言わなかつた。僕がこの言葉の意味を知るのは、もづちよつと先の話になる。

夏休みが目前に迫っていた。僕にとっては、2回目の高1の夏休みだった。なかなか体験できないことじやないか?なんにしろ、これでやっとあの気の滅入る教室やら授業やらから解放されると思つたら、僕は居ても立つても居られないような、そんな気分になつたね。なんなら勝手に夏休みを繰り上げてもいいくらいだったよ。ま、しなかつたけどね。

バイトが終わって下宿先に戻った。その日も夜中の10時過ぎ。僕は部屋のドアをそつと開けて中に入った。けどその日は珍しく美里はまだ起きていて、彼女はベッドに腰掛けでテレビを見ていた。

「なんだ、起きてたのか

「うん。お帰りなさい

「ただいま

そう言いつつ、僕はちょっとした違和感を覚えた。美里の声に、元気がないような気がしたんだ。

「美里、具合でも悪いのか?」

僕は言った。けど美里は、「そんなことないよ」とすかさず否定した。嘘をついてるなって、僕は直感したね。前にも言つたけど、彼女は周りのことをいつも気にして、周りに迷惑を掛けないようにしてたんだよ。そのためだったら、平気で嘘をつくんだ、彼女。

「ちょっといいかい?」

僕は嫌がる美里を無視して、彼女の額に手を当てた。

「熱があるじやないか。どうして何も言わなかつたんだ」

彼女の首筋に触れてみた。そこまでひどくなかったけど、熱があつた。やっぱりこの前のプールのせいなのかと、僕は後悔した。

「ごめんなさい……」

彼女はうつむいて黙りこくつちました。やれやれと僕は首を振つて、美里をベッドに寝かせた。よく見ると顔も青白かった。

「美里。僕は怒ってるわけじゃないんだ。これっぽっちも怒ってなんかいないよ。でもね美里、何がある時はそれをちゃんと言つてほしいんだ。迷惑なんかじゃない。僕はそうしてほしいんだ。分かってたかい？」

美里は目を伏せたまましばらく何も言わなかつた。でもその後小さな声で、「分かった…」と言つた。

「「めんね、お兄ちゃん」

見ると彼女は目淚まで浮かべていた。それは今にも消えてしまいそうな表情で、僕は悲しくなつちまつた。僕はなるべく明るく振舞つて、

「バカ。何泣いてんだよ。いいんだよ、謝らなくとも。お兄ちゃんこそ気付いてあげられなくてごめんな」

ここでやつと、美里は少しだけ微笑んだ。毛布で顔を半分隠して、目だけを出すような感じでわ。

「ありがとう…」

「気にするなよ。僕たち、兄妹じゃないか」

「うん…」

僕は美里の頭を撫でて、大家さんに薬をもらいに行つた。大家さんはキツチンで雑誌か何かを読んでいるところだつた。

「すみません、風邪薬か何かありますか？」

「あら? どうかしたの?」

大家さんは首をかしげた。

「いえ、妹が熱があるみたいで」

内心、僕はちょっと腹を立てていた。だつて彼女は夕方ごろにいつも美里と一緒にいたんだから、その日美里の体調が悪いのを知つていたはずだつたんだ。まさか気付かなかつたなんて言うんじゃないだろうなつて思つていた。

「「めんなさい、気が付かなくて…」

「そんなことはないですよ。急に熱が出ただけかもしませんし」

まあ心の中では、「ふざけんな」つて言つてたんだけどさ。

僕が薬をもらつて部屋に戻るゝとしていたら、大家さんが呼び止めた。

「最近、美里ちゃんあまり体調が良くないわね」

「ええ、そうですね」

「なにか悪い病気じやなければいいのだけど…」

「大丈夫ですよ。」心配なく

僕の声はあからさまにトゲトゲしてたんだろつた。けどそのときの僕にはそれを止めることはできなかつた。

大家さんはそんな僕の心情を知つてか知らずか、話を続けた。

「美里ちゃん、確かに10歳よね？」

「ええ、それが何か？」

よく分らない質問だつたからかもしれないけど、僕は大家さんが少しずつ嫌いになつてきていたな。

「もしかしたらつて思つたんだけ…。いえ、やつぱりなんでもないわ」

僕はそれに口クに返事もせず部屋に戻つた。

このとき僕が何を考えていたかつていうとね、やつぱり美里が頼りにできるのは自分だけなんだつてことなんだ。自分しか妹を守れなつて、信じて疑わなかつたんだ。

部屋に戻つて薬を飲ませながら、僕は美里に言った。

「明日病院に行つてみような。分つたかい？」

「いいよ、そんなことしなくても。ただの風邪なんだから」

「良くないよ。だつて美里、ここ1ヶ月くらいずっとじやないか

「だから、大丈夫だつて言つてるの！」

そう言つうと彼女は、布団をかぶつて寝つてしまつた。

きっと彼女はお金の心配でもしているのだろう。そう思いながらも、実はこのとき、僕はこのことをあまり深刻には考えていなかつたんだ。

美里が熱を出した次の日、ちょうど仕事が休みだつた大家さんに美里を任せて、僕は学校に行つた。本当は僕が残つて看病をしたかつたんだけど、美里が頑としてそれを拒否したんだ。彼女なりに気を遣つてくれたのが嬉しくて。それだけで泣きそうになつたね。

前にも言つたようにこの高校には屋上への入り口がなかつたからさ、僕は授業を受けるしかなかつた。保健室つて手もあつたんだけど、そう毎日行くわけにもいかないし、あれつてけつこう迷惑だからね。ま、学校にいると絶えず頭痛と吐き気がしていただから、行つても問題じやなかつたんだけどさ。

でも、そんな学校生活の中でも唯一楽しいものがあつた。それは同じクラスの女子、岸本沙織さんと話すことだつた。席替えがあつてとつぐの昔に隣同士じやなくなつていたんだけど、たまに向こうから声を掛けてきてくれていた。彼女はおとなしくて控えめな感じで、僕も話上手じやなかつたから、会話なんて呼べる代物じやな

かつたけど、そのときだけ僕はあの氣の滅入るような学校の中でもうトモであれただと思つ。

僕が席に着くと、岸本さんは女子の友達グループの中からシシシと抜け出してきて、僕の前に立つた。

「お、おはよ！」

「おはよ！」

「……」

まあ、こんな感じ。

とはいって、最初から比べるとだいぶマシになつたかな？少なくとも岸本さんは敬語を使わなくなつてたし。いや、話し方が丁寧なのはそれとはまた別なんだけど。

それからいろいろと話をして、流れは美里の話になつた。

「美里の奴、最近体調が悪いみたいでさ。ショッちゅう風邪っぽい症状になつたり、おなかを押さえたり、気分が悪そうにしてるんだ」

「そう、心配だね……」

彼女、本当に心配そうな顔をするんだ。他人のために本氣で心配してくれるなんてさ。いい子なんだよ。

「そういえば、妹さん、おいくつでしたつけ？」

何か似たようなことを昨日聞いたなと思いながら、「10歳だよ」と答えた。

「それがどうかしたの？」

気になつて僕が訊くと、彼女は突然顔を真っ赤にした。

「う、ううん、何でもないよ。ごめんなさい……」

僕はもううつりと詳しく訊きたい気もしたけど、やめておいた。

「でも、ひりやましいな……」

岸本さんが訊いた。僕は、「え？」と訊き返した。

「そんなに心配されて、妹さんがうらやましい。咲海くん、妹さんのこと話すとき、生き生きしてるとなんだもの……」

「あはは、そつかな……」

僕は妙に照れくさくなつた。そのときちよつと始業のチャイムが鳴つて助かつたけど。

「またね…」

岸本さんは小さく手を振つて席を離れた。

僕は授業中、大家さんや岸本さんの言つたことについて考えていた。妹が10歳であることと、体調が悪いことなんて関係があるのかなつて。

「ああ、そういうことか…」

結論に辿り着いて、よつやく理解した。そしてやはり、少し気恥ずかしくなつた。

「どうしろつてんだよ…」

まさか本人に直接言うわけにもいかないから、僕は少しだけ途方に暮れた。やっぱり女の子つてのは難しい生き物だよ。男とは根本的に違う生き物なんぢやないかな。あれだけは一生かかつても理解しきれそうにないや。

そんなことを考えつつ、僕はこつも思った。美里も大きくなつたんだなつて。それまではあまり意識してなかつたんだけど、少しづつ彼女も大人になってきてるんだと思うと、それは嬉しくもあり、少し寂しくもあつた。

その夜のことだ。半分夢の中で、浅い眠りについていた。体調の悪い美里をベッドで寝かせ、僕が下の床で寝ていたんだけど、ベッドの方から、なんだか呻き声が聞こえてきた気がしたんだ。

「……」

それはか細い、苦しみを押し殺したような声だつた。僕はそれがなんなのか気になりながらも、バイトで疲れた身体を起こすことができず、そのまま深い眠りに落ちて行つてしまおうとした。そのとき、ドサッと上から美里が転がり落ちてきた。しかも参つたことに、僕の上に落ちてきたんだ。

「うおっ？」

僕は驚いて飛び起きた。そして美里を見ると、彼女は苦しそうに笑つたんだよ。

「えへへ、落ちちゃつた……」

それまでに何度も美里がベッドから落ちていたことを考へると、それは不思議なことじやなかつた。けど、

「大丈夫か？」

「うん、『めんね』

そう言つうと美里は、ベッドに戻つて眠り始めた。さつきの呻き声と言い、何か変だと思つたけど、いまいち確信がなかつた。次の日に美里に訊いても、「大丈夫」としか答へないし、実際熱も下がつていた。あの呻き声だつて、時間が経つにつれて、本当にあつたかどうかも曖昧になつてきていた。なんとなく腑に落ちなかつたけど、またしても僕はそれを深くは考へなかつた。

今にして思へば、それは美里からの最後のメッセージだつたんだ。

7月の下旬、もう明日から夏休みつてこつその日は日曜日で、近

所の川原で花火大会がある日だった。当然美里は大はしゃぎで、風邪も少し良くなつたし、2人で一緒に行くことになつたんだ。前日には浴衣まで買いに行かされて、僕はピンク色の可愛らしい浴衣が似合うと思つてたんだけど、美里が選んだのは、黒い下地に白線で川の流れを描いた、すごく大人っぽいものだつた。それなりに値は張つたんだけど、あれはそれだけの価値があつたと思うね。黒い浴衣は美里の白い素肌によくマッチしていて、大家さんに結つてもらつた髪には派手過ぎず、それでいて上品な髪飾りが挿してあつた。思わず見惚れちまうようなその姿で、美里はほんの少しだけ頬を染めて微笑なんかしていたな。

「すごく似合つてるよ」

「ありがとう」

美里はくるりと回つてみせた。本当に可愛らしかつたな。

「それじゃ行こうか」

「うん！」

大家さんに見送られて、連れ立つて出掛けた。

美里は興奮しつぱなしだつた。川原中に並んだ出店をキヨロキヨロと見回しながら、「次はあれ！」を連発していた。僕らが生まれた町にはこういう行事がなかつたからさ。美里のはしゃぎようを見て僕も嬉しくなつた。

かき氷を食べ終わつた頃にアナウンスが流れて、花火の開始を告げた。僕たちは運良く人の少ないところを見つけてそこに腰を下ろした。

いい眺めだつた。鮮やかな花火の光がいくつも星のない夜空の中に浮かんでとても綺麗だつた。そしてその彩りが川の水面に映り、それがゆらゆらと揺れていた。実を言うと、僕はそれまで花火が嫌いだつたんだ。うるさいし、どこがいいのかちつとも分らなかつた。

でもそのとき僕は花火がこんなにも綺麗なものなんだつて初めて気が付いた。きっとそれは僕の隣に、僕の大切な人がいたからだと思う。よく言つだろ。料理はなんとかつて。

花火が夜空に打ち上げられているさなか、僕は隣に座っている美里を見た。美里は夜空の花火ではなく、僕を見ていた。目が合つた。美里の潤んだ瞳が僕を見ていた。白い素肌が花火の放つ光に照らし出されて色を変えていた。ドキッとした。美里が、僕の知っている美里じやないような気がした。黒い浴衣を着た美里。髪を結いあげた美里。僕の妹。黒い瞳が何かを訴えていた。花火の音が聞こえなくなつた。時間が止まつた。美里の唇が静かに動いた。何か言つていた。僕の意識は美里の白い肌に吸い込まれていく。何かが僕の身体の中で叫んでいるみたいだつた。目と目。唇と唇。彼女の頬を染めるのは花火なのか？こんな気持ち、初めてだつた。

何十発という花火が一斉に炸裂し、見物客の歓声に驚いて僕は我に返つた。

美里が顔を近付けていた。いや、僕が美里に顔を近付けていた。慌てて僕は顔を背け、夜空の花火に視線を戻した。

後に残つたのは、重く苦しい沈黙だけだつた。僕は何か言わなければと必死になつて考えた。美里はうつむいたままだつた。

「あのさ…、なんて言うかな。その…、ごめんな…」

「…うん」

僕は絶望的に死にたくなつていた。自分が今何をしようとしていたのか分かつてゐるのか？お前は美里に何をしようとした？自分で自分を心の底から憎んで、激しく罵つた。

僕は美里にキスしようとしていた。

2人で夜の川原を歩いた。僕の少し後ろを美里が歩いていて、2人とも何も喋らなかつた。

空に星はなくて、ただ月だけが浮かんでいた。満月だつた。僕は月にウサギはないと思ってているけど、たぶんあそこに星条旗は立つていないとと思うんだ。あんな遠くて綺麗なところに、人間なんかが行けるわけないよ。人間にそんなことできつこないんだ。だつて人間は、自分が何をしているのかさえ、よく分かつてないんだから。なぜ僕が美里にあんなことしようなんてしたのかも分かんないのに、月に行けるわけないさ。もし本当に月に行けるんだつたら、どうか教えてほしい。どうして僕はあんなバカなことをしたのかをさ。

「ねえ…」

背中の方で声がした。僕は振り返らなかつた。

「ねえ、お兄ちゃん…」

声は夏の虫の声より小さかつた。振り返るのが恐かつた。

「ねえ…」

美里がシャツの袖をつかんだ。僕は立ち止まつた。

そのまま僕らは無言のまま、2時間ぐらい突つ立つていた。本当は20秒くらいだったのかもしれない。

「ねえ、お兄ちゃん。線香花火、しよう

祭りの屋台でもらつた線香花火。ちっぽけなおまけをもらつて、美里はとても喜んでいたつ。

「お兄ちゃん…」

シャツの裾をつかんだ手が震えていた。その震えは僕にも伝わつて、僕の心臓を止めよつとしてた。

このまま何も話さずに帰りたかつた。けどそれじゃダメだ。きっとそれはできない。できそうにない。僕は心の中で何度も自分に言い聞かせた。もしかしたら、この状況を変えられるかも知れないといつ

て。

「…分かつた」

2人で1本ずつ取つてライターで火を付けた。祭りでの打ち上げ花火とは比べものにならないくらいの、小さな火だつた。

美里の花火が激しく燃え、先っぽに大きな火の玉を作つた。けどそのときちょうど風が吹いて、美里の火の玉は落ちてしまつた。「あ」と小さな声を漏らす美里。火の玉はあつといつ間に消えてしまつた。

「残念だつたね」

僕は笑いかけた。美里は頬を膨らませて、「いーもん、お兄ちゃんのより大きかつたから」と口をどがらせた。そして少しだけ笑つた。僕の花火は燃え続けた。弱々しい小さな火で、最後まで。

僕はその日、朝から最悪の気分だった。その日は1学期最後の日、終業式の日だつた。みんなで体育館の中に入つて、校長の話を聞いたりするあれだよ。僕はね、そういうた類の、体育館やグラウンドにみんなで集まつたりするのが大つ嫌いなんだよ。考えただけで吐きそうになる。一定の空間の中に、たくさんの人間が入つて来るんだ。気持ち悪いじやないか、そんなの。誰とも分からぬ他人と同じどこに何時間も閉じ込められるんだ。死にたくなつてくるよ、本当に。

そういうわけだから、僕はその日学校を休もうとした。でもそれもやめた。部屋には美里がいたんだから。

あの線香花火での会話が最後だつた。あのときは2人で無理して話をして、笑つて、忘れようとしたんだけど、時間が経つにつれてそれが苦しくなつていつたんだと思う。そしてあれ以来、1度も美里とは話していなかつた。1度もだよ。それだけあの部屋は、たつた1晩の間だけ、地獄と化していった。美里と目が合つ度に殺された気分になつた。ベッドで一緒に眠らなかつた。風呂も一緒に入らなかつた。蛇の生殺しさ。生きたまま死んでるみたいだつた。

学校には行きたくなかった。けど僕はこの町で、学校とバイト先とこの部屋しか知らなかつたんだ。どこにも行く場所がなくて、それで仕方なく、僕は学校に行くことにした。

僕はわざとゆつくり歩いて、終業式に遅刻しようとした。校門に着くと、生徒たちが体育館に入つていく姿が見えた。僕は頃合いを見計らつて、まるで泥棒みたいにして教室に入った。

誰もいない教室つてのは不気味だ。こんなところに1人でいる奴の気が知れないね。僕のことだけど。

タバコでも吸おうかと思ったけどやめた。なんとなくそんな気分になれなかつたんだ。やることもなく、僕は椅子に座つてぼうつと

天井を見上げた。

なんで自分はこんな所にいるんだ？ そんな疑問が頭に浮かんだ。大嫌いな学校。大嫌いな生徒たち。大嫌いな先生たち。そこには嫌いなものばかりだった。でもなぜ僕はそこにいる？ なぜわざわざ高校入試を受け直してまでそこにいる？ 今すぐにでもそこを飛び出したいのに、なぜ？

教室のドアが開いた。見ると、岸本沙織がそこに立っていた。

「どうして、ここに？」

僕は驚いて立ち上がった。眞面目な岸本さんが終業式をサボるはずない。

「その……、忘れ物しちゃって……」

嘘だ。そんなはずない。

「俺に、何か用？」

それしか考えられなったね。岸本さんは身体を小刻みに震わせていた。息遣いが聞こえてきた。

「私……私……」

岸本さんが僕の目を真っ直ぐ見つめてきた。彼女の目を、初めて直視した。

「私……あなたのことが……岩海くんのことが、好きです！」

やつと振り絞ったような声だった。顔中を赤らめて、岸本さんは肩で息をしていた。

「ごめんなさい……いろんなの、迷惑かもしれないけど、私、岩海くんのことが……岩海くんのことが……！」

なぜだろ？ このとき僕はなぜか、それが現実のこととは思えなかつたんだ。現実感がないって言つた。その代わり、僕の中である思ひが芽生え始めたんだ。

「えつと……これって何かのドッキリ？」

僕は訊いた。ひどく軽薄な声で。

岸本さんは身をビクッと引きつらせた。

「違うの！ 私は本当にあなたのこと……」

「あ、分かった。これって罰ゲームがなんかでしょ？そりなんだろ、やつぱり。おかしいと思ったんだよね。岸本さんが俺に告白するなんてや」

他のクラスメートより2個年上で、クラスから完全に浮いてしまつていた僕は罰ゲームのいいターゲットさ。

岸本さんは泣きそうな顔をしながら震えていた。

「違う…違うの…」

僕は明るく笑つた。

「なになに、どうしちゃったんだよ？岸本さんは演技が下手くそだなー。それじゃ罰ゲームつてバレバレじゃん。あはは」

僕は力バンをひつつかんで、教室を出た。

廊下を走りながら、僕は何度も心の中で繰り返していた。これはきっと罰ゲームかなんかなんだ。だつてそうだろ？岸本さんがお前のことを好きになるわけないし、ましてやお前なんかを好きになる奴なんかいやしないんだよ。もし万が一彼女が本当にお前のことが好きなんだとしたら、それは気のせいか気の迷いか、あるいは彼女がキチガイかのどれかだよ。

ただ分かつてるのは、お前がどうしようもないクズ野郎つてことだけさ。

ひどく、殺伐とした気分だった。もう、このまま死んじゃうんじゃないかつてくらいのさ。実際、死んでもいいと思つたりもしていた。携帯電話の電子音がメールの着信を知らせた。受信1件アリの表示。部屋には僕と美里の2人きり。美里はテレビを見ていた。どこが面白いのか分からぬ、くだらないドラマだったな。画面の中で女優が笑つた。作り物の中で作り物の笑いを浮かべていた。

僕はメールを読んだ。知らないアドレスからだつた。

『今から学校に来てほしい。1年4組の教室で待つてる 石川』  
どうでもよかつた。どうでもよかつたけど、部屋にいるよりはマシだつた。僕はベッドから起き上がって、夏休みになつたばかりの学校へ向かつた。

教室に入ると、3人の生徒がいた。知らない女子と知らない男子。彼らの後ろに身を縮めている岸本さんがいた。岸本さんは僕に気付くと、目を見開いて、怯えた。なんとなく、可笑しかつたな。

女子の顔には見覚えがあつた。いつも岸本さんと一緒にいた奴だ。そいつとその横の男子は僕をまるで犯罪者でも見るような目で見ていたな。女子の方が進み出てきて僕の前に立つた。女子は、「呼び出して悪い」と前置きして、

「なんで呼ばれたか分かる?」

やたらと偉そうな口振りで言つた。僕は、「さあね」と投げやりに肩をすくめてみせた。男子の方の眉がピクリと動いてさ。笑つちまいそつだつたね。

「昨日、あなた沙織から口クられた時、あの子にひどいこと書つたわよね?」

まるで警察の尋問だ。なんなんだよ、お前ら。

「あの子すごく引っ込み思案で、私小学校の頃から一緒に、あの子が誰かに「ク」とことなんて見たこともなかつた。あの子は初めて勇気を出してあなたに「ク」つたのよ。それなのに…」

僕は窓の外を見た。遠くに大きな入道雲が見えた。雨が降りそうだな。

「もし付き合えないのなら付き合えないって言つても、私は構わないと思う。けどあなたは、あの子の勇気を台無しにしたのよ。その責任は取つてほしい」

僕は男子の方を見た。ぶん殴りたくてしようがないって顔してたな。「あなたに謝つてほしいの。本当に心を込めて、あの子に謝つてほしい」

謝れか！それこそ僕がこの世で一番嫌いな行為さ。あんな形だけの儀式に、何の意味があるって言つんだ？謝る側も、本当に心の底から謝罪しているのが分からないし、謝られる側も、絶対にそいつを許したりしないさ。そんなことで、何でもかんでも解決するなんて思つたら大間違いさ。

僕は岸本さんの前に立つた。岸本さんは手を合わせようとした。自分の腕をきつく握つていた。

ここで僕はね、飛びつきり冴えた「冗談を思いついたみたいな気分になつてね。それを言つたら岸本さんはどうするかって、どうなるかつて、すごく興味が湧いたんだ。で、言つたわけだ。

「それで、いくら払えばいいの？」

僕は冷たく言い放つた。岸本さんが顔を上げ、次の瞬間ワッと泣きだした。いい気分だつた。背筋がゾクゾクした。僕の中で暗い何かがのた打ちまわつていた。はは、本当にいい気分だつたね。

「てめえ！」

今まで何も言わなかつた男子生徒が、いきなり僕を殴つてきやがつた。僕は吹つ飛ばされて机の中に突つ込んだ。女子たちが悲鳴を上げた。

「てめえ、岸本がどんな思いしてんのか、分からねえのか…」  
男が喚いていた。

嘘つきめ。お前はただ僕を殴りたかっただけなんだろ？前から気に食わなかつた僕を殴るチャンスを狙つてたんだろう？

ところが、僕のマトモな思考はここまでだつた。それから先はよく覚えていない。気付いたときには僕は自分の部屋のドアを乱暴に開けていた。美里が身体を強張らせた。

僕は力バンを壁に叩きつけた。無性にイライラして、手当たり次第に部屋にあつたものを蹴つ飛ばしてたな。

「どうしたの、お兄ちゃん…」

妹が怯えながらも、僕に声を掛けてきた。

「つるさい！」

僕は大声で怒鳴つた。美里はわけが分からず泣き出した。その泣き声が、僕の頭の中にガンガン響いてくるんだ。岸本さんが頭を抱え、「やめて！やめてよ！」と叫んでいる。僕は男子生徒を殴つていい。何度も何度も殴つている。そんなイメージの断片が、美里の泣き声に混ざつていた。

「つるさい！泣くな！」

僕は美里に詰め寄つた。美里は泣き止まなかつた。

「黙れ！黙れよ！」

美里の肩を掴んで揺らした。美里はそれから逃れようとして僕の手を放つた。

僕はキレた。

僕は美里の頬を平手で殴つた。殴つた瞬間、美里は泣きやんだ。僕の中から、サーッと血が引いていくのを感じた。

美里は殴られたところに手を当てていた。うつむいたまま、身動きひとつしなかつた。

「お兄ちゃんのバカ…」

小さく呟いた。

「お兄ちゃんのバカ！」

美里は駆け出してドアから飛び出した。階段を駆け下りていく音がした。

そしてそのまま、家の外に出て行ってしまった。

部屋に残された僕は、自分の手のひらを見た。熱を帯びて、火傷したみたいに熱かつたのを覚えてる。きっと一生消えないんだって、そう思った。

世の中ってのは、他者との信用の上に成り立っているんだと思う。例えばキミが橋を渡るとき、キミはその橋を造った人や会社なんかを信用して、崩れるかもしないなんて考えもせずに橋を渡るだろう？もしかしたらその橋は手抜き工事や設計ミスで、いつ崩れてもおかしくない橋なのかもしないのに、キミは無意識のうちに「この橋は崩れない」って信用して橋を渡る。

教科書にしてもそうさ。教科書に書いてあることを、キミは本当のことだと信じて勉強する。それが本当に本当のかなんていちいち考えたりしない。

世界はそんな、もろくて不安定な信用の上にあるんだよ。もしその信用をなくしてしまったら、人は誰も信じられなくなつて、何もできなくなつちまう。

僕が最初になくしたのは、大人への信用だった。

毎日毎日、来る日も来る日も、僕は僕を産んだ女に殴られていた。ご飯を吃るのが汚いとか、部屋が散らかっているとかで、いつも殴られていたな。そんな僕を助けてくれる大人なんていなかつた。僕は母親が嫌いになつて、そして、大人が信用できなくなつた。

そんな僕が唯一信用できたのは、学校の友達だつた。友達は無条件で信用できたんだよな。そして小中学校のときはいつも友達と陽が暮れるまで遊んだ。とても楽しくて、こんなのがずっと続けばいいと思っていた。けど、それは無理だつたんだよ。事件は僕が中学3年生のときに起きた。

当時僕のクラスに、金山つていう奴がいてさ。色白で、太つていて、メガネを掛けていて、何をやっても鈍くさい奴で、いつも机で暗い顔をしてうつむいていた。そんな奴に友達が出来るわけなくて、そいつはいつも1人だつた。

ある日僕は掃除中に、ふと興味が湧いて、金山に話しかけてみたんだ。それまで1度も話をしたことがなかつたんだけど、これが意外と話しやすい奴だつたんだよ。それにすごく聞き上手だつた。そしてなにより、金山は掃除を一生懸命する奴だつた。金山に見向きもしない奴らが汚していつた床をさ、本当に一生懸命磨いてたんだよ。僕は参つちまつたね。そいつにそんな一面があるなんて全然知らなかつたんだ。でもきっと他の奴らは、特に女の子は、そんな彼の一面に見向きもしないだろうな。女の子は顔で男を決めるんだよ。性格なんて考へてるもんかい。誰も金山が掃除を頑張る姿を見ていいんだよ。見たつて評価しないんだよ。それが僕には悲しかつたんだ。僕は金山と友達になりたかった。

ところが数日後、金山が学校を休んだ。そしてそのまま何ヶ月も休み続けて、終いには卒業式にすら顔を出さなかつた。もちろんこれはクラスの中でも問題になつて、何度も話し合いが開かれた。けどみんな無関心だつた。笑つてゐる奴すらいた。けど少しづつ、金山がなんで学校に来なくなつたのかが分かつてきつたんだ。

金山はいじめに遭つてゐたんだ。それもハンパないいじめだよ。口にするのも反吐が出るようなひどいじめさ。でも僕にとつて一番シヨツクだつたのは、そのいじめをしていたのが、今まで僕が親友だと思つていた奴らだつたつてことさ。僕は絶望したね。文字通りの絶望だよ。僕の親友は、金山をいじめるような最低の連中だつたんだ。そしてクラスの奴ら、いや学校の奴ら全員が、金山を不登校に追い込んだんだつて気付いたよ。その日からかな、僕が友達を信じられなくなつたのは。

僕はベッドの上で横になつて、そんなことを思い出していた。金山は今頃どうしているだろうか。美里が出て行った部屋で考えていた。外は小雨が降っていた。さつきの入道雲が近付いているんだろうか。美里は傘を持つていなかつた。大丈夫だろうか。

僕は首を振つて枕に顔を強く押し付け、きつく目を閉じた。そんなこと考へるな、ほつとけ。そう言い聞かせた。

ドアを誰かがノックした。僕は顔を上げた。

「はい？」

ドアの向こう側から声がした。

「入るわよ」

大家さんが部屋の中に入つてきた。いつになく険しい表情だつた。

僕は起き上がりつてベッドの縁に座つた。何の前置きもなく、大家さんは言つた。

「雨、降つてるわよ」

大家さんの声は静かだつた。

「知つてます」

「これからタ立ちになるわ

「そうですね」

「いいの？」

「大家さんには、関係ないですよ」

僕はイライラしていた。早く消えてくれ。そう思つた。

「美里ちゃん、泣いてたわよ」

「大家さんには、関係ないですよ」

「迎えに行つてあげなさい」

「大家さんには、関係ないですよ」

「きつとあなたのことを持つて

「関係ないって言つてるでしょ！」

部屋が静かになつた。僕の声の木靈が聞こえてきそつで、ひびく居心地が悪かつた。

外の雨は強さを急に増し始めていた。土砂降りだった。美里の泣き顔が頭から消えてくれなかつた。

「行きなさい…」

大家さんの声は静かで、優しかつた。

僕はあてもなく町の中を走り回つた。大きな雨粒が身体を打ちつけていた。雨に濡れたシャツが身体に貼り付いて走りにくかつた。さつきまでのイライラした気分は消えちまつてた。もう僕は美里のことしか考えられなくなつてさ、必死で美里を探したよ。どこかで美里が助けてと泣いている気がしたならなかつた。言葉じや言い表せないような焦りと不安が身体の中で暴れていたんだ。

川原の道を走つていた時、視界の端に白い影が映つた。見覚えのある白いワンピース。激しい雨に打たれながら、彼女は、倒れていた。

「美里オ！」

僕は駆け寄つて、彼女を抱き起こした。美里の顔は真つ青で、身体は驚くほど冷たかつた。

「美里！美里！」

僕は何度も彼女の名前を呼んだ。けど彼女は目を覚まさないんだ。何が何だか分らなくなつて、僕は必死に叫んだ。声の限り、力の限り助けを求めた。誰か助けて下さい。誰か助けて下さい。誰も来なかつた。雨が激しくなつた。まるで世界から弾き出されたみたいな、そんな気分だつたな。

「誰か、誰か来てよ！美里を助けてよ！」

これは、神様が僕に下した罰だつたのかもしれない。お前はそこでずっとそつしていろいろて、そこでずっと叫んでいろいろて、言われた気がしたんだ。

病院の待合室、僕は濡れたままそこに座っていた。美里は緊急処置室に運ばれていた。あれからどうやって病院まで運ばれたのか、正直よく覚えていない。

僕以外にはいなかつたな。僕は看護婦さんが持つてきてくれたタオルに包まつていた。着替えたらどうかとも言われたけど、僕は断つた。

病院の中は清潔で、とても白かつたのを覚えている。お医者さんや看護婦さんたちが慌ただしく走り回っているのを見ながら、僕は全然見当違ひのことを考えていた。

僕はこの病院に、武器を持ったテロリストたちが攻め込んでくる様子を想像していた。彼らは手にしている拳銃やマシンガンなんかでみんなを威嚇して病院を占拠するんだ。そこに僕が颶爽と登場して、テロリストたちから銃を奪つて、そいつらをみんな殺した後、捕らわれていた美里を助け出すんだよ。まったく、僕の頭は本当に狂つてしまつたとしか思えなかつたね。美里が大変だつてのに、そんなくだらないことをしたりするんだからさ。

3時間くらい経つて、緊急処置室の赤いランプが消えた。僕はそれに気付いて、部屋から出てきたお医者さんを1人捕まえて訊いた。

「先生、美里は？ 美里は大丈夫なんですか？」

お医者さんは僕の肩に手を置いて笑つた。大きな身体をしたひげ面の先生で、なんとなく熊みたいたがつた。

「大丈夫だよ」

先生はそう言つた。けど僕が安心する前に、彼は顔を曇らせた。

「話があるんだ。来てほしい」

僕は先生の部屋に通されて、丸い椅子に座らされた。ぐつしょり濡

れた服が気持ち悪かつたな。

「着替えなくて大丈夫かね？」

先生が訊いた。僕は大丈夫だと答えた。

先生は僕の正面に座つて、すごく深刻な顔をした。そしてこう言つたのさ。

「私は医者だ。私の仕事は患者に正しい知識を伝えることだと私は思つてゐる。これから話すことに私は嘘を吐かないし気休めも言つたりしない。それが医者としての私の信念でもあるし、患者やその家族にとつても大切なことだと思つてゐる。キミにはかなり辛いことだとは思うが、どうか受け止めてほしいと思つてゐる。私の話を聞く覚悟はあるかね？」

先生の声は外見と違つて優しかつた。けどそれは僕の中で膨れ上がりしていく不安を消してくれるものじゃなかつた。

そんなこと何で言つんだ？ それじゃまるで…。

「美里が、美里がどうかしたんですか？」

声がどうしようもなく震えたね。イヤな予感が頭の中を回つてゐた。先生は最初少しだめらつていたけど、やがて意を決したかのように口を開いた。

「美里ちゃんは

病院のベッドで眠る美里を、僕は見ていた。その姿はとても愛らしくて、いつもと同じだった。ただ一つ、腕に刺さった太い点滴の針を除けば。

こんなに、こんなにも穏やかな寝息を立てている美里に、僕は言わなくちゃいけないことがあった。それはとてもとても辛いことで、口にしたり考えたり、思い出したりするのも嫌だつたんだけど、僕はそれを美里に、妹に伝えなくちゃならなかつたんだ。

先生との会話を思い出していた。

「それって、どういうことですか……？」

僕は間の抜けた声で訊き返した。先生の言葉は認めたくないついで、ひどく現実味がない気がしたな。何かの悪い冗談だとも思つた。僕は先生が笑つて、「冗談だよ」って言うのを期待した。でも先生はこう続けた。

「まだ精密検査をしていないから詳しいことは分からぬが、そう見て間違いないだろ。　　聞いているかね？」

それから先生は美里の症状について色々と話してたけど、僕の頭には、いや、たぶん耳にすらそれは入つてなかつたね。先生の言葉を、今となつてはほとんど思い出せないでいるんだからさ。

「しばらくは入院してもらつて様子を見るが……。若海くん、それなりの覚悟をしておいてほしい」

先生の顔は相変わらず暗かつた。そんな顔をしないでくれ、頼むから。

僕は言った。

「先生、嘘でしょ……？」

身体は凍えそうなくらい冷たいのに、僕はめちゃくちゃに汗をかい

ていた。

美里が…死ぬ…？

「岩海くん、キミは……」

「嘘だつて言つてください！」

次の瞬間、僕は先生に掴みかかっていた。襟を掴んで乱暴に揺さぶつた。

「嘘だつて…、嘘だつて言えよ…」

そんなはずない。美里が死ぬはずない。そんなこと考えたくもない。でもね、無理なんだよ。何も考えたくないでも、悪いイメージばかり浮かんでくるんだ。止まってくれないんだ。

あんなに、あんなに元気だったのに。あんなに元気だったのに。病気なんて嘘に決まってる。だって美里はあんなに元気、だつただろうつか？

暴れる僕を先生は両肩を掴んで止めた。身体は向こうの方が倍近くあつたから、すぐに僕は暴れることができなくなつた。

「落ち着きなさい！」

人を安心させるような、強くて腹に響く声。先生は僕の目をまっすぐに見つめてきた。

「キミがそんなことどうするんだ！キミはあの子のたつた1人のお兄さんなんだ。キミがうろたえても何の解決にもならない！」その言葉を聞いて、僕は全身の力が抜けて、床に座りこんだ。ただ悔しかつた。そして悲しかつた。大声で泣き叫びながら、僕はそこを動くことができなかつた。

余命1カ月。美里の命が永遠じゃなくなつた。

僕が病室のドアをノックすると、中から可愛らしい声が、「どうぞ」と返ってきた。美里の病室は個室で、日当りのいい南向きの部屋だった。美里は普通のベッドに寝かされていて、栄養補給のための点滴の管がつながっていた。

「どうだい、調子は?」

「退屈」

そう言って美里はにっこりと笑った。

僕はそのときまだ、美里に、美里の病気のことを告知していなかつた。いや、できないでいた。だつてできるわけないじゃないか。こんなにも幸せそうな彼女に、そんなこと、とても言えないよ。

けど、僕は言わなくちゃならないんだ。残酷なことかもしれないけど、美里はそれを知らなくちゃならないと思うんだ。だつて彼女は……。

僕はベッドの横の椅子に腰掛けて、美里の顔を眺めた。恥ずかしいのか、美里は顔を赤らめていた。

「なに?」

「実はな美里、お前に大切な話があるんだ」

何度も何度も言おうとして言えなかつた言葉を、僕は言おうと決心した。きっとそれが遅くなればなるほど、美里を傷付けてしまう気がしたから。

「実はお前は

「知ってる」

美里の言葉に耳を疑つた。

「え?」

「私の病気のこと、私、ずっと前から知つてたよ」

その言葉とは裏腹に、美里は優しく微笑んでいた。僕は何がなんだか分からなくて、声が出なかつた。美里は静かに語りだした。

「1年くらい前から風邪みたいなのが全然治らなくて、そのうちお腹とかもどんどん痛くなってきたの。それで母さんに一度病院に連れて行つても「うつたとき、私の中に悪い病氣があるつて分かつたの」

美里は「うう」と、ちょっと悲しそうに声のトーンを落とした。

「お兄ちゃん、今まで黙つててごめんなさい。私、お兄ちゃんには知らないでいてほしかつた。この病氣が見つかつたとき、もう手遅れになつてたの。だから私、お兄ちゃんといつぱい思い出を作りたかつたから、私ね、お兄ちゃんと一緒にいたかつた。死んじやう前に、お兄ちゃんとたくさん、たくさん遊びたかつた…」

美里は一呼吸置いて、僕に哀願するような目をして言つた。

「母さんを、母さんを悪く言わないで。母さんはきっと、私が痛い治療をたくさん受けよう、お兄ちゃんと一緒にいた方がいいって思つたの。私ね、母さんとたくさんお話して、学校はお休みして、お兄ちゃんのところに來たの。母さんは、私がいると邪魔だからつて、お兄ちゃんが嫌がるからつて…。それが私にとつて一番の幸せなんだつて、そう思つたから、母さんは家を出て行つたんだと思うの」

僕は、僕はなんて馬鹿な男なんだう。美里はずつと、ずつと病氣で苦しんでいたのに、僕はそれに気付いてあげることができなかつたんだ。なんて、最低な兄貴だ。

「だからお願ひ。母さんを恨まないで。母さんは、母さんは」  
そう言いながら、どんどん美里の声が小さくなつていつた。見ると顔中に冷や汗をかいていた。

「おい、どうしたんだ？」

僕は美里の身体に手を置いた。身体が尋常じやないくらいに震えていた。

「美里ー・どうしたんだよー」

美里の表情が苦痛で歪んだ。

「」

「」

鋭い金切り声を上げて、美里の身体がベッドから跳ね上がった。獣じみた声で呻きながら、ベッドに爪を立てていた。

「ああああああああ！」

狂ったようにのたうち回つて、美里は掛けた毛布と共にベッドの上から転がり落ちた。荒い息遣いのまま毛布の中で苦しむ美里。声を聞いたのか、何人かの医師や看護婦が部屋になだれ込んできた。

「下がつて！」

3人がかりで彼らは美里を押さえつけた。暴れる美里に猿ぐつわが噛まれた。看護婦の1人が引っ搔かれて血を出していた。その様を、僕は見ていた。何も出来ないまま、無力なまま、そこに突つ立つていたんだ。恐かったんだ。あのときの美里を見て、僕はただ恐ろしくて、1歩だって動くことができなかつた。まったく、情けないよね。

今でもあのときの光景を思い出すと、僕は恐くなつちまつ。そして、自分の無力さがイヤと言つほど見せつけられるんだ。

次の日、美里はベッドの上でぐっすりと眠っていた。痛み止めと睡眠薬の効果かもしれない。その様子を、僕は横から見ていた。そして前日起こったことを考えていた。

突然的な発作だと先生は言った。この世のものとは思えないような激しい痛みが全身を襲うそうだ。タチの悪いことに、この発作はいつ起ころかが予想できない上、体力の落ちている美里には命の危険があるということだつた。次の発作に耐えられるかどうかの保証はない。先生はそう言った。

「あんな小さな子がこれほどの苦しみを、たつた1人で何ヶ月も耐えてきたなんて…」

先生の言葉は、僕の胸に突き刺さつた。誰もいない部屋の中で、たつた1人で発作に耐える美里の姿が浮かんだ。

美里は、ずっと僕にサインを送っていたんだ。ばれたくない、心配をかけたくないって思いながらも、彼女は見えないサインを送っていたに違いないんだ。僕はそんな彼女の必死のサインに気付いていながら、結局何もしなかったんだ。忙しいとか疲れてるとか、そんな言い訳ばかりして何もしようとはしなかったんだ。どうしようもない、救いようのないやつだよ、岩海圭介って奴はさ…。ベッドで美里がうつすらと目を開けた。薬が効いているせいか、ぼんやりとしていた。

「お兄…ちゃん…？」

「美里、大丈夫か？」

「お兄ちゃん、ごめんね…ごめんね…」

畜生。謝らなきやいけないのはこっちの方だつてのに。

「ごめんな美里。お兄ちゃん、何もできなかつた…。本当にごめん

…」

美里は何も言わなかつた。美里は僕を、きっと許さないだろうな。

「お兄ちゃん、何か、お話しして…」

唐突に美里が言ったので、僕は戸惑った。

「え、お話?」

美里は赤面して、「うん」と頷いた。

「お話か…」

僕は必死に、美里に聞かせる話を考えた。考えて考えて、僕はあることに気が付いた。

僕は何も持つていなかつた。美里に聞かせてあげれるような、病気の妹を勇気づけてあげれるような話を、僕は1つも持つていなかつたんだ。本当に、1つもだよ。それに気付いて、僕は泣いてしまつた。18年も生きてきて、僕には何にもなかつたんだ。妹のささやかな願いすらも叶えられないような人間だつたんだ。

そんな僕の類に、何か温かいものが触れた。美里の小さな手のひらが、僕に伸ばされていた。

ああ、いつも僕は美里に助けられてばかりだな。あの子は、僕の心の支えなんだ。こんなにも救えない僕を、彼女は救つてくれるんだ。そういうえば、いつかこんなことがあつたな。

僕は夢を見たんだ。ひどい夢さ。部屋の中で僕と母さんが怒鳴り合つている夢。母さんが部屋を出て行つた後、僕は部屋の中を見回した。部屋の隅で小さな女の子がぬいぐるみを抱えて震えていた。まだ小さな頃の美里だつた。僕は美里を呼んだ。おいでつて何回も呼んだ。けど美里は動かないんだ。僕の方を、その大きな瞳を見開いて、怯えながら見ているんだよ。そんな目で見つめないでくれ。そんな目をしないでくれ。僕は夢の中で何度も叫んだね。まるで美里が遠くに行つてしまいそうな気がしてさ。待つて美里。僕を置いて行かないで。

目が覚めて、僕はベッドから飛び上がつた。飛び出してきそうな心臓を押さえて、僕は肩で息をしていた。

「どうしたの？」

美里が眠そうに田をこすりながら訊いてきた。僕はそんな美里を強く抱きしめて、何度もそこに美里がいることを確かめたんだ。美里は驚いていたけど、やがて僕の背中にそっと腕を回してくれたんだよ。そしてこう言つてくれたんだ。

「大丈夫、私はここにいるよ…」

その夜が、もう何十年も前のよつた気がしてならない。

僕は美里の伸ばした手のひらを自分の手のひらでそっと包んだ。今にも壊れてしまいそうな細い指。でも、ちゃんと生きていて、温かい指。

「私、お兄ちゃんのそばにいたい。それだけで、それだけでいいの。ずっと、私のそばにいて、手を握つていてほしい…」

ベッドの上で、余命1カ月の少女は優しく笑つた。これじゃ本末転倒もいいところ。僕が逆に、美里に勇気づけてもらつなんてさ。僕たちは何も言わず、長いことそうしていた。ずっと続くわけないなんて思つていても、僕たちはそれをやめられなかつた。

ある日の午後、美里は僕に訊いた。病室の廊下がりだつた。

「ねえお兄ちゃん…」

「ん?」

「人は死んだら、どうなるのかな…」

それは普段なら他愛もない質問かもしれない。でもこの状況でその質問は、重すぎるよ。

「そんなこと…」

そんなこと言わないでほしかつた。美里の口から、「死ぬ」なんて。でも僕は、それにちゃんと答えることにした。

「決まつてるじゃないか。また新しく生まれ変わるものや」

美里は、「そうだよね」って笑つた。

「お兄ちゃんは生まれ変わつたら何になりたい?」

僕はしばらく考えた。それまで一度もそんなこと考えたことなかつたんだからや。

「僕は、僕は生まれ変わつたら風になりたいな」

「風?」

「やつ風さ。誰のことも気にせずに、誰からも気にされずに、自由に空を舞う風になりたいんだ。自分の好きな所に行つたりしてさ。きつと気分がいいぜ。でもね、時々誰かが、例えばキミのような子が、僕に気付いてくれるんだ。そして僕を感じてくれて、僕を励ましてくれるんだ。そう風だよ。僕は風になりたいんだ」

自分でもよく分らなかつたけど、僕はそう思つたんだ。

美里はそれを聞いて、「素敵…」と言つてくれた。

「私は…」

美里はやつ言いかけて口をつぐんだ。

「私は、私はね、生まれ変わつたら、お兄ちゃんの妹にはなりたくないな…」

彼女はそう言った。僕は軽くショックだったね。いや、「めん、かな  
リショックだったよ。

美里は顔を真っ赤にして、口元にいたずらうまい笑みを作った。

「私ね、生まれ変わったらお兄ちゃんの  
コンコン、ヒノックの音がした。看護婦さんが頭をひょっこり出し  
て、

「圭介くんにお客さんよ」  
と言つた。

「はい、ありがとうございます」

そう言つて、僕は席を立とうとした。けどその前に、

「えつどじめん、なんだっけ？」

美里は顔を毛布に隠して小さく答えた。

「ナイショ」

僕は病院の待合室に向かつた。誰が来たのかさっぱり見当が付かなか  
つたけど、待合室に着いたとき、僕はハツとした。

待合室には1人の女子高生がいた。小柄でおとなしそうなその姿を、  
僕が忘れるわけもなかつた。

岸本沙織がそこにいた。

病院の中庭は噴水やら芝生やらがあつてひょっとした公園みたいな雰囲気の場所だった。大きな木なんかも植えられていて、その下にベンチがあつた。僕と岸本さんはそこに座った。

長い、本当に長い沈黙のあと、岸本さんは「うん…」と彼女に詫びた。けど僕が彼女にしてしまったことを考えると、なんだか謝ることすらも悪いような気がしたな。僕はきっとその場で自殺して、死を持つて償うべきだったのさ。そのくらい、僕のやつたことの罪は重いと思うんだ。岸本さんはいつもみたく弱々しい声で、「うん…」と答えただけで、また黙つちまつた。

普段は誰も気にしないけど、空氣にも質量があるんだ。そのことを改めて感じることができたね。ついでに酸素のせいかな、何かが肌に突き刺さっているみたいだつた。

空は気の滅入るような快晴だった。やっぱり、空の色が青つてのはおかしいと思うんだ。せめて曇つてくれればいいのにって、そう思つた。

「アインシュタイン…」

隣で小さな声がして振り向いた。

「なに？」

「岩海くん、前私にこう言つたわ。俺はただのアインシュタインと友達になれるつて…」

岸本さんはクスリと笑つた。

「ああ…、そんなこと言つたね。確か物理の時間だったかな？」

そんな日もあつたな。まだ僕が彼女と隣同士の席だったころ。もうあれから5000年は経つていてる気がした。

キミはアインシュタインって科学者を知つてるだろ？相対性理論やらなんやらを発見した天才物理学者さ。物理の教科書に載つていた彼の写真を見て、僕はこう思つたんだ。もしアインシュタイン博士

が天才じゃなかつたら、彼はどうなつていたんだろうつて。もし彼が平均的な頭脳を持つていて、なんとか理論を発見したりしていかつたら、彼はここまで有名にはならなかつただろうね。それどころか、友達なんかもできなかつたんじやないかな。僕はアインシュタインの専門家じゃないからあまり詳しくないんだけど、彼つてかなりの変人なんだろ？写真を見ても頭はモジヤモジヤで舌なんか出して、どう見たつて奇人変人さ。これで彼が天才じゃなかつたら、果たして彼に友達はできたんだろうか？僕はできなかつたと思う。みんなは人を見た目で判断して、すぐに見限つちまうからさ。彼はたまたま天才物理学者で、たまたま相対性理論を発見したから、みんなが興味を持つて近付いて来たのさ。

でも僕は違う。僕はきっと彼が天才じゃなくとも、彼が相対性理論を発見しなくとも、彼の友人にならうつて思うと思うんだ。根拠なんてないけど、僕はそう思うんだ。たぶん、なんとなくだけど、僕と彼は似ていると思うんだ。学力とか見た目とかじやなくて、中身がさ。

だから僕は岸本さんに言つたんだ。「俺はただのアインシュタインと友達になれる」つてね…。

僕がそんなことを思い出していると、隣で岸本さんは静かに笑つた。「私ね、岩海くんのその言葉を聞いて、この人はなんていい人なんだろうつて、そう思つたんだ…。可笑しいよね。でもそう思つたんだから仕方ないの。この人ならつて…。だから、だから…」

話をしながら、岸本さんの声は消えていった。僕はいたたまれなくなつた。僕はいい人なんかじやない。そんなんじやないんだ。

岸本さんは2人の間の沈黙を払つかのように、話題を変えた。

「妹さんの具合、どう…？」

「うん…。美里の奴、日に日に悪くなつていつて。身体もすっかりやせちまつて、毎日点滴を打たれてるんだ…あと1ヶ月持つかどうか分からんんだ」

岸本さんが息を呑むのが聞こえた。そこまでは聞いていなかつたら

し。

「ごめんなさい。私…知らなくて…。ただ入院しているとしか…。ごめんなさい…」

彼女は目に涙を浮かべていた。その涙はきっと、僕と美里のために流された涙だつたんだと思う。

「気にしなくていいよ。俺、もう覚悟はできるから…」  
とつさに嘘をついてしまった。覚悟なんてできてない。覚悟ができるているのはきっと美里の方だ。あの子はまだ小さいから自分が死んじやうことをうまく理解していらないだけかもしれないけど、僕よりずっと強い子なんだ。少なくとも美里は、自分の境遇を嘆いてはない。

「…僕、あいつはずつと離れて暮らしててさ。2年くらいかな、一度も会わなかつたのは。それで4月に僕がこの高校に入ったとき、美里が僕の家に来たんだよ。あんときは驚いたなあ。いきなり何の前触れもなくやって来て、『ここで暮らす』だつてさ。週末の度にどつかに出掛けたりしたんだ。本当に可愛い妹でさ、僕なんかより、ずっと、ずっといい子だつたんだ…」

岸本さんは僕の告白を静かに聞いていた。

「僕はね岸本さん、ひどい奴なんだよ。岸本さんが思つているほどいい人間じゃないんだ。僕は人が信用できなかつた。母親にはいつも殴られてたし、友達には中学のころに…。中3のときね、金山つて友達がいじめに遭つてたんだ。僕は金山をいじめていた奴らが大嫌いになつた。金山を不登校にまで追い詰めた奴らに我慢ならなかつたんだ。だから僕は、友達なんか信用できない、そんなのいらないつて思つたんだ。でも、それは違うんだ」

僕は自分が泣いているのに気付いた。うまく喋れなかつたけど、僕は構わず続けた。

「僕が、僕が本当に嫌いだつたのは、本当に1番許せなかつたのは、僕自身だつたんだよ…。僕は金山が不登校になつてもあいつの家に行こうとしなかつたし、自分であいつを助けてやろうともしなかつ

たんだ。その上、今まで友達だった奴らに責任を全部押し付けて、勝手に嫌いになつて、自分を守ろうとしていたんだ。僕は悪くないつて思い込もうとしたんだ。…「こんなのは僕の最低だ。一番悪いのは僕なんだ。いろんな人を傷付けて、そのくせ自分が被害者面してたんだ。でもそれを認めたくないで、だからいろんなものを嫌いになつて、その度に自分を嫌いになつて…。けど誰かに頼らなきや生きていけなくて、八つ当たりして…。逃げてたんだ。僕は人から、自分から逃げてたんだよ…」

まったく情けないね。病院の中庭で、僕は人目もばからずに寛ぎ泣いてたんだから。でもそのときの僕の言葉に、嘘はなかつた。嘘があるとすれば、それは…、

「でもね、そんな僕にも好きなものはあつたんだ。心の底から好きだつて思えるものがさ。美里とか、田尾先輩とか、岸本さんとかがね。全部嫌いになつてしまおうと思つても、嫌いになりきれないんだ。いつも心のどこかで、自分を認めてくれるもの、自分を許してくれるもの、自分と似たものを探してるんだ」

このとき僕は、どうして自分が学校に行くのが分かつた気がした。確かに世の中は憂鬱で気の滅入ることが多いけど、中には、そうごく稀に、僕の好きなものがあるんだよ。それに会いたくて、僕は学校に行くんだ。

気付くと、岸本さんは僕の手を握つてくれた。涙ぐんだ笑顔でそこにいてくれた。なんだか、「大丈夫だよ」って言われているような気がして、とても嬉しかったな。

「夏休みが終わつたら、また学校に来てね…。私、待つてるから…」2人でベンチから立ち上がつた。青い空がちょっとだけ、いいもののように思えてきていた。

「美里ちゃん、きっと大丈夫だから…」

「ありがとう…」

そのまま僕は彼女に背中を向けて別れよつとした。けど別れる前に、僕は岸本さんに振り返つて言つた。

「彼に…すまなかつたつて伝えてくれないか?」

「分かつた…」

僕は歩き出した。後ろで岸本さんが泣いているような気がしたけど、

僕は振り返らなかつた。

病室に帰る途中で見た鏡には目を赤くした僕が映っていた。すぐに泣いちまいのは僕の悪い癖かもしれないな。涙もろいって言つより、ヒステリックなんだよ、僕は。

そんな目を水で洗つて冷やしてみてもなかなか赤みが取れなかつた。あきらめて病室に入ろうと思つてドアに手を掛けたら、中から声が聞こえてきた。僕は反射的にドアノブから手を離し、聞き耳を立てた。

「美里ちゃん、体調はどう?」

「はい、今日はいつもよりいいみたいですね」

「それはよかつた。はい、これおみやげね」

「わあキレイ。ありがとうございます」

どうやら大家さんと美里みたいだつた。後ろめたさを感じつつも、僕は2人の会話を盗み聞きした。

「本当にごめんなさいね。私、全く気付くことができなくて……」

「そんな……、悪いのは私なんです。私、みんなにずっと嘘ついてたから……」

「美里ちゃんは優しいのね……」

「……大家さん、私ね、本当に悪い子なんです。みんなに嘘ついて、迷惑ばかりかけて……。お兄ちゃんも、私といると迷惑だつたのかな……」

「そんなことないわよ。美里ちゃんはちつとも悪くない。……圭介くんだつて、とても嬉しそうにしていたわ」

なぜか、僕に言つてゐるみたいだつた。

「私、お兄ちゃんといて幸せでした。生きてきた中で、一番幸せでした。もう、何の後悔もないんです」

「……美里ちゃん、もう嘘をつかなくともいいのよ」

「私、嘘なんか

「」

大家さんが美里を抱きしめたような気がした。

「本当に、もう無理をしなくていいのよ。泣いてもいいの。美里ちゃんは1人で頑張つて来たんだから、ここで泣いてもいいのよ…」突然、決壊した堰みたいに、美里が泣きだした。声にならない声で、美里は叫んだ。

「私…、死にたくないよおお！」

ずっと抱えていた、美里の本音だつた。彼女はずつと苦しんでいたんだ。でもそれを僕たちに気取られないように、たつた1人で隠していたんだ。10歳の女の子は、ずっと死の恐怖と戦つっていたんだ。クソ。僕はどんでもない誤解をしてた。僕は彼女が、自分の死を受け入れているのだとばかり思つていた。けど本当は違つた。そんなこと当たり前なんだ。彼女は僕たちのために、強くなぐちゃいけなかつたんだ。本当は泣きたくて仕方なかつたのに…。

美里は泣き疲れて眠つてしまつたようだつた。病室から出てきた大家さんに、僕は深くお辞儀をした。

病室の前の椅子に僕たちは座った。大家さんからもらつた缶コーヒーを少し飲んでから、僕は大家さんに言つた。

「すみません、いろいろと迷惑掛けちゃつて…。それと、さつきはありがとうございました…」

それから僕は、前日に起こつたある出来事を、心に支えていたものを大家さんに話した。

「実は、手紙が、來たんです。母からの手紙でした。…まだ恐くて読めないんです…」

大家さんは、「そう…」とだけ答え、缶コーヒーに口を付けた。

「ひどい母親でした。僕をいつも殴つて、ろくに世話もしないで、いつも怒鳴つてました。僕はそんな母が嫌いでした。美里が来たときだって、母を本気で殺したくなりました。けど、不思議なんです。そんな母親からの手紙なのに、捨てれません。正直、手紙が來て嬉しかつたんです…」

美里は母さんを恨まないでほしいと言つた。母さんには相談できる相手がいなかつたんじやないだろうか？もしかしたら母さんはたつた1人で、自分の娘の病気と鬪つたのではないだろうか？そして美里を僕に託すことが、最良の方法だと思つたんじやないだろうか？大家さんはそしてしばらく考え込んだあと、正面の壁を見つめながら言つた。

「昔ね、私にも娘がいたの。そうね、生きていればちょうど美里ちゃんくらいかしら。その子が亡くなつたとき、私は思つたの。私はきちんと、正しくあの子を愛せたかなつて。あの子の母親になれたかなつて。ずっと自分に問い合わせても、結局答えは出なかつたわ…」大家さんは指先で指輪を回していた。ひどく悲しい、遠い目をしながら。

すると大家さんは僕に腕を伸ばし、僕の頭を抱きかかえた。僕は抵

抗しなかつた。大家さんからは、甘くて、とても懐かしいにおいがしたな。それがなんなのか、僕は知っているような気がした。

「圭介くん、あなたがお母様を嫌っているのは知ってる。でもね、これだけは覚えていて。人を育てるのに、正解も不正解もないのよ。それそれが愛する者のために必死に考えてやつたことに、間違いなんてないの。お母様は圭介くんを愛しているわ。子を愛さない親なんかいないのだもの。ただ、どうやって愛すればいいのか分からないだけ…」

泣かないって決めたつもりだった。けど、無理だよね。どんなに我慢しても、涙つてのは次から次へと溢れてきて止まらないものなんだからさ。母さんのにおいに包まれながら、僕は子どものみたいに泣き続けた。

来てほしくないって思つても、時間は勝手に進んでいく。それは残酷かもしれないけど、きっと抵抗することはできないんだ。そして、ついにその日は来た。

夜、美里の病室に僕はいた。美里の症状はどんどん悪化していく、もはや口をきくのも億劫そうにしていた。僕はベッドの横に座り、彼女の手を握つていた。

「お兄ちゃん……」

弱々しい声。

「ん？」

「連れて行つてほしい場所があるの……」

僕は知つていた。それがきっと、美里の最後の願いなんだつて。

「…分かつた」

僕は美里をおぶつて病院を抜け出した。先生も看護婦さんも、誰も何も言わなかつた。バイクの後ろに美里を乗せ、病院を出発した。バイクに乗つていると、イヤなことを全部忘れることができたんだ。でもそのときばかりはそういうかなつたな。街の中を美里と一緒に走りながら、僕は何だか虚しくなつちました。街にはこんなにもたくさんの人間がいるのに、誰も僕や美里のことを知らないんだ。みんなそれぞれ好き勝手に生きている。でもこれは僕にも言えることだよね。僕だって、彼らがどんな人間で、どんな人生を歩んできたのか知らないわけだからさ。

しばらくして僕たちはある場所にやつて來た。美里が最後に望んだ場所は、2人で花火を見たあの川原だつた。

「あそこ……」

美里が指で示した方に行つて、そこに座つた。美里は僕に膝まくら

されて、川の方をぼんやりと眺めていた。

辺りは、とても静かだった。僕たち以外は誰もいなくて、聞こえてくるのは遠くを走る電車の音だけだった。

「お兄ちゃん、ありがとう……」

妹が呟いた。

「私、とても幸せだったよ。お兄ちゃんといへ、本当に……。今だつて、とても幸せ……」

「美里……無理をしなくていいんだ。恐いなら恐いって言つていいんだよ……」

僕がそう言つと、美里は僕を見上げて、すぐ柔らかな笑顔で言つりだ。

「お兄ちゃん、私、今までたくさん嘘をついてきた。けどね、これだけは嘘じやないよ。私は今、とっても幸せなの。お兄ちゃんと一緒にいれて本当によかった……。ありがとう、お兄ちゃん……」

風が吹いていた気がする。草とか川とか、空気のにおいがしてた。電車の音が離れていった。

僕は美里の頭を優しく撫でた。美里は気持ち良さそうに目を細めて、

「見てお兄ちゃん、星がキレイだよ……」

僕は夜空を見上げた。月の無い夜、空は満天の星空だった。それがなんて星座の、なんて星なのか知らないけど、すぐ綺麗だったな。あの星の光はきっと、何十万年もかけて地球に届いたんだろうな。そんなことを考えると、自分がいかにちっぽけな存在なのかって実感するんだ。でも、どんなにちっぽけでも、僕は生きているんだよ。すごく孤独で、気の滅入るようなことばかりの人生でも、100回のうち1回くらいは、きっと幸せなことが起きるんだ。僕はその1回のために、生きていけると思つ。だって、僕の心の、美里と触れ合つていたところが、まだほんの少し、温かいような気がするのだから……。

電車の音が聞こえなくなつて、僕の耳に聞こえるものは何もなくなつた。僕の心は不思議なくらい穏やかだつた。それはたぶんきっと、

そのときの光景が、星空や美里や川原なんかが、どうしようもなく  
キレイだったからなんだろうな。こう言つと安っぽく聞こえるかも  
しないけど、本当にキレイだったな。本当に、夢のようだったん  
だ。

僕はいつまでも星空を見上げ続けた。ただ、風だけが吹いていた。

あとがき

最後まで読んでいただきありがとうございました。  
拙い文章で読み辛いところもあったと思います。  
これからも精進を重ね、よりよい作品を作っていくことを願っています。  
できれば評価の方をよろしくお願いします。  
本当に、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5802d/>

---

今夜、風の吹く場所で

2010年10月10日01時14分発行